

折原峠遺跡
折原中堤遺跡
古城遺跡

平成15(2003)年3月

島根県八雲村教育委員会

おり はら とうげ 遺 跡
折 原 峠
おり はら なか づつみ 遺 跡
折 原 中 堤
こ じょう 遺 跡
古 城



平成15(2003)年3月

島根県八雲村教育委員会

序

八雲村教育委員会では、八雲村の依頼を受け、「厚生年金・国民年金積立金還元融資施設八雲地区簡易水道第2次拡張事業折原配水池築造工事」に伴う折原峠遺跡、「ウルグアイ・ラウンド農業合意関連対策山村振興等農林漁業特別対策事業八雲村中央公園整備工事」に伴う折原中堤遺跡、「農村総合整備モデル事業農業用用排水路整備工事」に伴う古城遺跡の発掘調査を平成6年度に実施しました。本報告書は以上3つの遺跡の調査成果をとりまとめたものです。

折原峠遺跡の調査では、丘陵斜面から弥生時代後期の加工段と縄文時代のものと考えられる落とし穴、また、折原中堤遺跡の調査では尾根頂上部から弥生時代後期後半の竪穴住居跡や加工段などが検出されました。さらに、古城遺跡の調査ではピットや縄文時代晚期の深鉢が見つかっています。

この報告書が地域の歴史を解明するうえでの糸口になることを期待すると共に、郷土の歴史と文化に対する理解と関心を高めることに少なからずお役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご協力いただきました土地所有者、地元の方々、島根県教育庁文化財課、並びに関係者の皆様、また、直接発掘調査に携わっていただきました作業員の皆様に衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

八雲村教育委員会

教育長 泉 和夫

例　　言

1. 本書は、八雲村環境課（現在は上下水道課と住民課の一部に分かれる）及び、八雲村産業課の委託を受けて、八雲村教育委員会が平成6（1994）年度に実施した次の3つの事業に伴う発掘調査の調査成果を取りまとめたものである。

〔折原岬遺跡〕 八雲村環境課（現在は上下水道課と住民課の一部に分かれる）より委託。

厚生年金・国民年金積立金還元融資施設八雲地区簡易水道第2次拡張事業折原配水池築造工事に伴う折原岬遺跡発掘調査。

〔折原中堤遺跡〕 八雲村産業課より委託。

ウルグアイ・ラウンド農業合意関連対策山村振興等農林漁業特別対策事業八雲村中央公園整備工事に伴う折原中堤遺跡発掘調査。

〔古城遺跡〕 八雲村産業課より委託。

農村総合整備モデル事業農業用用排水路整備工事に伴う古城遺跡発掘調査。

2. 本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次の通りである。

〔折原岬遺跡〕 島根県八束郡八雲村大字東岩坂 396-5番地

確認調査面積 61 m²

発掘調査面積 102 m²

〔折原中堤遺跡〕 島根県八束郡八雲村大字東岩坂 3839-4番地外2筆

確認調査面積 150 m²

発掘調査面積 473 m²

〔古城遺跡〕 島根県八束郡八雲村大字西岩坂 723-2番地・727-2番地

範囲確認調査面積 18 m²

計画変更により本発掘調査は実施していない。

3. 調査組織は以下の通りである。

〔平成6年度〕 現地調査

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 佐原通司

調査指導者 東森市良（島根県立安来高等学校教諭）

広江耕史（島根県教育庁文化課文化財保護主事）

事務局 伊野憲次（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主事）

作業員 安部当子、安部益子、石倉和義、石倉 功、石倉恒雄、石倉暁子、石原多鶴

石原政子、稻田慎平、金森高文、佐藤五月、須山恵美子、武田裕子、田中和美

春名民子、深津光子、深津泰久、藤原秀子、山崎シマ子、山根 隆、山根利子

遺物整理 深津光子、武田裕子、田中和美

〔平成14年度〕 報告書作成

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 泉和夫

調査指導者 中川寧（島根県埋蔵文化財調査センター）

事務局 三好淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員 田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺物整理 善家幸子、高尾万里子

4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）

池淵俊一（島根県教育庁文化財課）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、柳浦俊一（同）、

椿真治（同）、中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）、丹羽野裕（島根県立博物館）

岩橋孝典（同）、石田爲成（岡山県吉備埋蔵文化財センター）

5. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。

6. 本書で使用した方位は磁北を示す。

7. 本書に掲載した「第2図：位置と周辺の遺跡（1:25,000）」は株式会社ワールドが建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製して作成した『八雲村管内図』を使用し、「第1図：八雲村位置図（1:400,000）」については島根県松江土木建築事務所の管内図を基準として使用した。

8. 「第2図：位置と周辺の遺跡（1:25,000）」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図I』（出雲・隠岐編）1993年3月と対応している。

9. 土壌および遺物の色調には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。

10. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。

SJ…堅穴住居跡 P…ピット SK…土坑 SD…溝 T…トレンチ

11. 本遺跡出土遺物及び調査記録は八雲村教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 位置と環境	1
第2章 折原峠遺跡	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査の経過	9
第3節 遺跡の概要	10
1.落とし穴	12
2.加工段	13
3.溝状遺構	17
4.遺構外出土遺物	18
第4節 まとめ	20
第3章 折原中堤遺跡	23
第1節 調査に至る経緯	23
第2節 調査の経過	23
第3節 遺跡の概要	24
1.堅穴住居跡	26
2.加工段	29
3.焼土坑	30
4.遺構外出土遺物	31
5.T-2トレンチ	37
第4節 まとめ	38
第4章 古城遺跡	41
第1節 調査に至る経緯	41
第2節 調査の経過	41
第3節 遺跡の概要	43
1.T-1トレンチ	43
2.T-2トレンチ	44
3.T-3トレンチ	45
第4節 まとめ	46

第1章 位置と環境

八雲村は島根県の東部、松江市の南にあたり、北と西は松江市(北:旧大庭村・西:旧忌部村)、南西部は大原郡大東町(旧海潮村)、南東部は能義郡広瀬町(旧山佐村・旧広瀬町)、北東部は八束郡東出雲町(旧意東村・旧出雲郷村)に囲まれている。松江駅よりバスを利用して約26分で八雲村役場に、34分で熊野大社前に到着する。松江市街地への利便性に恵まれ、そのベッドタウンとして近年急速に宅地化が進み、県下市町村の中で高い人口増加率を示す村である。

村の規模は東西8km・南北10km・面積約55.41km²で、総面積の80%以上が山林で占められている。この山間に手のひらを広げたような形に谷が形成されているが、これらはすべて意宇川本支流の浸食堆積作用によるものである。大きな谷に意宇川、桑並川、東岩坂川、川原川が形成した谷がある。その谷筋の堆積地には余すところなく水田が開かれている。平野はあまり発達をみせず、川が合流する村の北側(意宇川の中流域)部分に盆地状に展開している。

遺跡はこの谷と平野を取り囲む部分に集中し、下流に向かうほど密集している。以下、調査遺跡の報告にあたり、周辺の代表的な遺跡について時代毎に概略を記す。

旧石器時代の遺跡としては、空山遺跡(F62)が熊野空山山頂に位置する。1971年に実施された学術調査により、前期旧石器時代と考えられる握槌、握斧、盤状石器、削器が出土した。しかし、これら石器の剥離痕が自然に生じる破碎痕とする意見もあり、この石器が果たして人為的に加工されたものなのか、自然石であるのかの結論は出ていない。この他、真ノ谷遺跡(106)や折原上堤東遺跡(88)からも旧石器時代にさかのばる可能性のある石器が出土している。

縄文時代になると遺跡の調査例は増加するが、遺構に伴うものは少ない。その中にあって、西ノ谷遺跡(P73)からはサヌカイト製ポイント形石器、黒曜石の二次加工のある剝片石器とともに82個のピット状の落ち込みが検出されている。これらのうちP-1～P-15は長軸5m、短軸3.5mを測る楕円を描き、その中央にP-16～P-20が方形に配置され、上屋構造を推定することも可能である。また、前田遺跡(97)では川辺から晩期のドングリの貯蔵穴が見つかっている。実際にドングリが出土した土坑は4個であったが、立地や規模から貯蔵穴と考えられる土坑が多数検出されている。この他、底部中央に小さなピットをもつ土坑も発見された。遺物は出土していないが、形態などから縄文時代の落とし穴と思われるものであり、折原上堤東遺跡、折原畔遺跡(101)、青木遺跡(98)、谷ノ奥遺跡(36)、真ノ谷遺跡からも同様の土坑が検出されている。

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べると少なく、各遺跡から出土する遺物の量も僅かである。前期の遺物としては前田遺跡から壺と甕の破片が数点出土している。併し、河川堆積層からの出土であり、遺構は見つかっていない。後期の遺跡としては、本報告書に掲載した折原畔遺跡が存在する。後世の掘削により大部分が失われているが、第2加工段の床面から後期中葉の草田2期に含まれる甕が出土している。また、同丘陵上には折原上堤東遺跡(第Ⅱ調査区)が位置し、弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭の堅穴住居跡5棟が見つかっている。この他、村内からは熊野大社々地出土と伝えられている銅鐸がある。しかし、正確な出土場所は特定できていない。外縁付紐式に属するものであり、現存する高さ19.9cm(身高16.4cm、鋤高3.5cm)、鋤厚2～3mm、重量648gを測る。文様は全体に不鮮明であるが、紐は綾杉文、鋤は鉛垂文、身は4区画となる袈裟襷文(四区袈裟襷文)で飾られている。古墳時代になると遺跡数が増加し、7割以上がこの時期のもので占められる。前期の古墳としては、

3基の方墳からなる小屋谷古墳群(22)が存在する。埋葬主体は箱式石棺と壺棺及び組合式木棺であり、副葬品としては3号墳の組合式木棺内から刀子1本と四鈔鏡1面が出土している。

中期以降になると小規模な古墳群が丘陵上に造られるようになる。谷ノ奥遺跡の北東には、増福寺古墳群(42)・土井古墳群(19)・増福寺裏山古墳群(41)が分布している。増福寺古墳群は一辺6.0~14.5mの方墳26基によって構成されている。特筆すべきは、20号墳から出土した須恵器子持甌の親甌と、前田遺跡から出土した子甌とが接合できたことである。本来は親甌の肩部に4個の子甌が取り付けられていたものであり、このうちの1個が前田遺跡の河川内から、もう1個が親甌と一緒に20号墳の西側平坦面からつぶされた状態で出土している。残る2個の子甌は発見されていない。土井古墳群は、増福寺古墳群の北側に位置する古墳群で、一辺7.0~11.0mの方墳13基によって構成されている。増福寺裏山古墳群は土井古墳群と同じ丘陵に立地し、一辺10m前後の方墳8基からなる。これらは尾根により便宜上3つに分けられているものの、本来は同一の群と考えられる。総数47基を数えるこれらの古墳群は、密集度において、松江市大草町にある西百塚山古墳群と同一の群をなしていたと考えられる八雲西百塚山古墳群(21)に次ぐものである。この2つの古墳群が村内では密集度の高いものである。この時期の住居跡には、折原上堤東遺跡(第I調査区)があげられる。方形の堅穴住居跡4棟が見つかり、このうちSI-03からは多数の土師器に混じり住居内祭祀に用いられた泥岩製有孔円板4点が出土している。

古墳時代後期に入ると、出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ池ノ尻古墳(5)、雨乞山古墳(1)が築かれる。池ノ尻古墳は東岩坂川が造り出した谷の水田中に位置する。墳丘は水田耕作の際に削られ、現在では石室がむき出しになっている。原位置から動いている石材もあるが、現状での石室の規模は内法で幅1.9m、奥行き1.3m、高さ1.6mを測る。雨乞山古墳は平野北東にそびえる雨乞山南麓に築かれたものである。墳丘は現状で一辺7.5×8.0m、高さ2.5mを測り、方墳と考えられる。意宇川下流域の古墳の影響を受けたこの古墳は、八雲村最大規模の石室を有し、この地域の有力な豪族の存在を想定させる。一方、同時期の横穴墓は丘陵斜面に数基から十数基の単位で営まれている。密集度の高いものに四歩市横穴墓群(3)がある。増福寺古墳群の南側の丘陵山腹に分布するものであり、確認できる横穴だけで28穴を数える。玄室の平面プランは、大部分が方形で天井は丸天井形をなしているが、非常に丁寧な四注式正整家形のものも数穴見られる。この他、後期の造構として前田遺跡から検出された貼石造構がある。川辺に自然石を並べたものであり、造構周辺からは、勾玉、切子玉、土鉢、手捏ね土器、琴、白玉が入った須恵器の壺、赤色顔料が塗布された土師器の高杯、瓢箪、多量の桃核等が出土している。また、付近の河川内からは頭椎式の木製刀把装具や木製刀形、赤色顔料により優美な文様が描かれた木片などが出土していることから、有力首長を中心に行われた川辺の祭祀遺跡と考えられる。

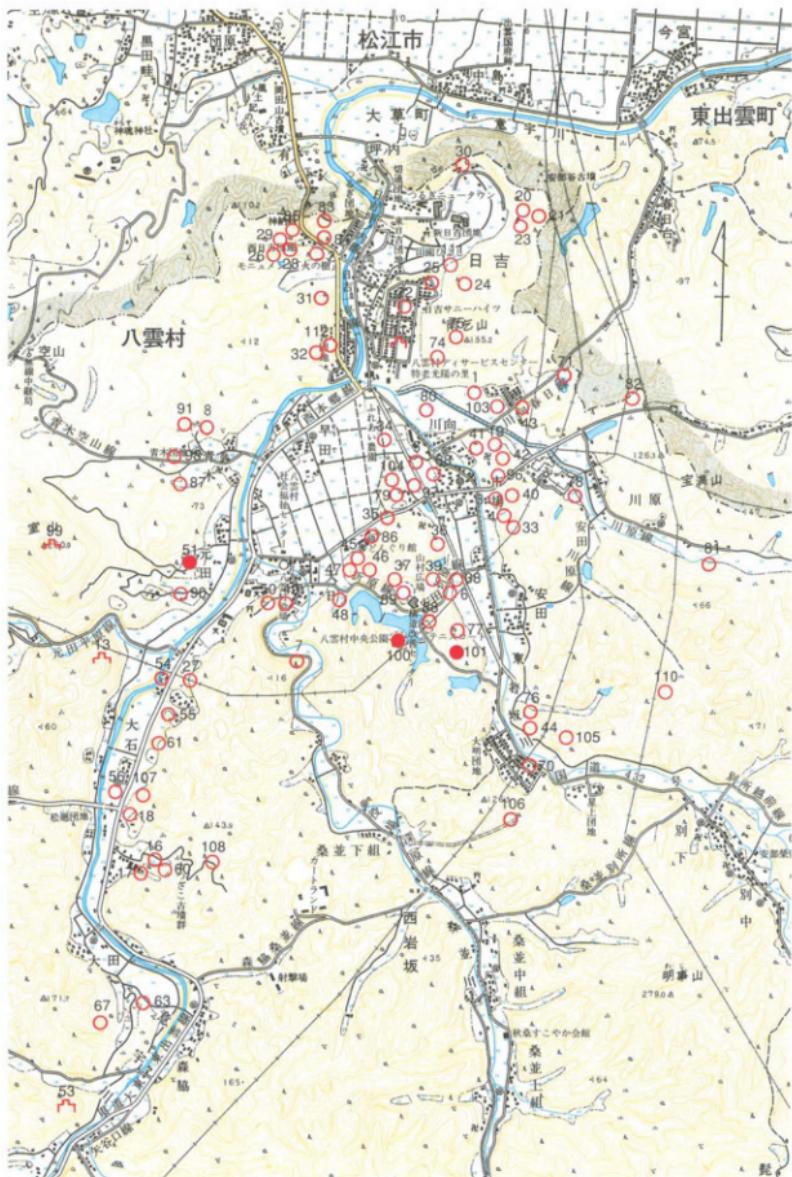
奈良時代の遺跡としては青木遺跡があげられる。第I調査区で発掘された掘立柱建物跡の床面からは須恵器の壺蓋内面に「社邊」と刻まれたヘラ書土器(転用便)が出土している。付近からは須恵器の灯明皿、「林」と書かれた墨書き土器2点なども見つかり、注目される。八雲村は、733年に編纂された『出雲国風土記』によると、出雲国守や意宇郡家が置かれていた「意宇郡大草郷」に含まれ、八雲村域だけでも1つの郷を形成し得ないほど人口は希薄だったようである。それでも当地域には中央の神祇官の神名帳に登録されている官社が9社(熊野大社・久米社・宇流布社・前社・田中社・詔門社・猪井社・速玉社・石坂社)、出雲国守で登録されている國社7社(毛弥社・那富乃夜社・國原社・田村社・

河原社・笠柄社・志多備社)が存在していた。このことは、村域の各地に集落が形成され、それぞれが祭祀を行っていたことを裏付けている。

中世以降の遺跡の調査例は僅かである。熊野大社近くにある叶ザコ遺跡(F58)からは常滑系の壺を使用した鎌倉時代の墓が見つかっている。また、墳頂部より五輪塔の基壇が検出された中山2号墳(35)や、多数の火葬墓が検出された谷ノ奥遺跡が存在する。谷ノ奥遺跡の古墓群は低丘陵上に位置し、25基以上の五輪塔が発見されている。この他にも村内各所には多くの五輪塔が点在している。本村は尼子氏の居城月山富田城のあった広瀬町と接し、中海・宍道湖が近いという地理的条件から要衝には山城が築かれ、熊野の地には尼子十旗の中に数えられる熊野城跡(F12)が存在する。戦国時代頃の伝承・文化財が数多く残り、今後中世の遺跡の増加と重要な遺構の発見も予想される。



第1図 八雲村位置図 (1:400,000)



第2図 位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	種 別	概 要
1	雨乞山古墳	古墳	方墳、石棺式石室
2	岩坂陵墓参考地	古墳	円墳
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	4穴確認
5	池ノ尻古墳	古墳	石棺式石室、須恵器
6	安田横穴墓群	横穴墓群	2穴
7	岩塙口横穴墓群	横穴墓群	8穴
8	青木横穴墓群	横穴墓群	2穴確認
11	東岩坂要塞山城跡	城跡	山城、石垣、削減
13	大石城跡	城跡	山城
16	松坂古墳群	古墳群	方墳4基以上
17	松坂横穴墓群	横穴墓群	8穴以上
18	高野横穴墓群	横穴墓群	直刀、鉄鏹、斧他
19	土井古墳群	古墳群	方墳13基
20	大内草上古墳群	古墳群	円墳2基
21	八雲西白嶺山古墳群	古墳群	方墳47基
22	小屋谷古墳群	古墳群	方墳3基、削減
23	大円寺跡跡	散布地	上部器
24	大谷古墳群	古墳群	方墳2基、子持壇
25	御崎谷遺跡	散布地	須恵器、士師器、埋没
26	神納遺跡	散布地	須恵器、土師器
27	松原遺跡	散布地	須恵器、土師器他
28	神納横穴墓	横穴墓	
29	神納古墳群	古墳群	5基
30	和田平横穴墓群	横穴墓群	3穴、埋没
31	岩瀬古墳群	古墳群	方墳1基、円墳1基
32	勝負谷古墳群	古墳群	方墳2基、円墳2基
33	高丸古墳群	古墳群	円墳2基
34	山崎遺跡	散布地	須恵器
35	中山古墳群	古墳群	方墳5基
36	谷ノ奥遺跡	古墳・古墓群	方墳3基、円墳1基、火葬墓
37	北折原遺跡	古墳他	方墳1基、横穴2穴
38	安田古墳群	古墳群	円墳2基
39	外輪谷横穴墓群	横穴墓群	12穴、直刀
40	四歩市古墳群	古墳群	方墳6基
41	増福寺裏山古墳群	古墳群	方墳8基
42	増福寺古墳群	古墳群	方墳26基
43	原ノ前横穴墓群	横穴墓群	須恵器、鉄器
44	細田横穴墓群	横穴墓群	平入家形
45	禪定寺横穴墓群	横穴墓群	6穴
46	禪定寺古墳群	古墳群	方墳10基
47	折原横穴墓群	横穴墓群	3穴
48	折原下堤遺跡	散布地	須恵器、土師器
49	大日堂横穴墓群	横穴墓群	4穴確認、須恵器
50	岩坂沖社横穴墓群	横穴墓群	須恵器
51	古墳遺跡	散布地	須恵器、土師器、縄文土器
53	舟形城跡	城跡	
54	黒瀬古墳	古墳	
55	掛合遺跡	散布地	須恵器
56	川中井跡	神社跡	
60	松延遺跡	土壤帯	須恵器
61	人石窓跡	崖跡	
63	源郎窓跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
67	源郎山横穴墓群	横穴墓群	
68	紙屋遺跡	散布地	磨製石斧
70	鋸谷遺跡	散布地	削減(現在の大明神地)
71	穴田遺跡	散布地	円筒埴輪、上部器
74	開弓古墳群	古墳群	方墳2基
75	雨乞山遺跡	祭祀遺跡	土崩削
76	綱川古墳群	古墳群	方墳2基確認
77	松ノ前古墳	古墳	方墳
78	浜井場遺跡	散布地	須恵器、土師器
79	中山五輪塔群	古墳	五輪塔、石塔は原位変動
80	戸波遺跡	住居跡他	須恵器、陶器、漆器
81	岸徹谷五輪塔群	古墳	五輪塔
82	脊三郎谷横穴墓群	横穴墓群	8穴
83	津井古墳群	古墳群	方墳10基
84	芦井東横穴墓群	横穴墓	1穴開口
85	落井西横穴墓群	横穴墓群	11穴以上
86	禪定寺遺跡	住居跡	陶器、須恵器、石器
87	青木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
88	傍原上堤遺跡	住居跡	豎穴住居跡、掘立柱建物跡
89	折原中堤北遺跡	散布地	須恵器
90	上元川遺跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
91	椎木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器
92	福原寺横穴墓群	横穴墓群	2穴確認
93	前田遺跡	祭祀遺跡	自然河川跡、木製琴
94	高木遺跡	住居跡	豎穴住居跡、掘立柱建物跡
95	中山遺跡	住居跡	豎穴住居跡、土師器
96	福原寺横穴墓群	横穴墓群	2穴確認
97	前田遺跡	祭祀遺跡	自然河川跡、木製琴
98	青木遺跡	住居跡	豎穴住居跡
99	窟山城跡	城跡	
100	折原中堤遺跡	住居跡	豎穴住居跡、土師器
101	折原跡遺跡	住居跡	豎穴住居跡、弦生土器
103	赤坂遺跡	散布地	須恵器、土師器
104	中山遺跡	散布地	須恵器、土馬
105	宮谷遺跡	生産遺跡	製炭
106	芦ノ谷遺跡	住居跡	加工段、落とし穴
107	反田遺跡	散布地	須恵器
108	淮谷與遺跡	散布地	上部器
110	舘浦遺跡	住居跡	須恵器、磨製石斧
111	大谷遺跡	散布地	旧河川、須恵器、土師器
112	勝負谷遺跡	散布地	須恵器、土師器

[註]

- 註1 『増補改訂鳥根県遺跡地図I』(出雲・隠岐編) 鳥根県教育委員会 1993年3月 (P-1)
- 註2 赤沢秀則「1. 出土遺物・時期」『南講武草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』鹿島町教育委員会 1992年3月 (P-1)

[参考文献]

- ・八雲村文化財調査報告1 「空山遺跡」「鳥根県八束郡八雲村空山遺跡発掘調査概報」
空山遺跡調査団・八雲村教育委員会 1972年3月
- ・八雲村文化財調査報告3 「八雲村の遺跡」 八雲村教育委員会 1978年3月
- ・八雲村文化財調査報告4 宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う『土井13号墳発掘調査報告書』
八雲村教育委員会 1979年3月
- ・八雲村文化財調査報告7 昭和55年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う
『福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1981年3月
- ・八雲村文化財調査報告8 日吉台サニーハイツ造成工事に伴う『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群』発掘調査報告書
八雲村教育委員会 1981年3月
- ・八雲村文化財調査報告10 昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う
『福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1982年3月
- ・八雲村文化財調査報告11 県道大東・東出雲線改良工事に伴う『中山2号墳・中山五輪塔群』発掘調査報告書
八雲村教育委員会 1982年3月
- ・八雲村文化財調査報告13 新山村振興農林漁業対策事業に伴う『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』
八雲村教育委員会 1994年3月
- ・八雲村文化財調査報告16 「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告II」
『山崎遺跡・前田遺跡(第I調査区)発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1999年12月
- ・八雲村文化財調査報告17 西岩坂地区一般農道整備事業に伴う『真ノ谷遺跡発掘調査報告書』
八雲村教育委員会 2000年3月
- ・八雲村文化財調査報告19 「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告IV」
『前田遺跡(第II調査区)発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 2001年3月
- ・八雲村文化財調査報告20 「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告V」
『谷ノ奥遺跡発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 2002年3月
- ・『折原跡遺跡終了報告』 八雲村教育委員会 1995年8月
- ・『古城遺跡発掘調査終了報告』 八雲村教育委員会 1995年2月
- ・『青木遺跡第I調査区終了報告』 八雲村教育委員会 1996年8月
- ・『八雲村誌』 八雲村 1998年12月
- ・『石棺式石室の研究』 出雲考古学研究会 1987年10月
- ・『神々の国 悠久の遺産』-古代出雲文化展- 鳥根県教育委員会 1998年3月
- ・『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(西の谷遺跡)
鳥根県教育委員会 1987年3月
- ・勝部 昭 「出雲・隠岐発見の青銅器」『古文化談叢8』 1981年
- ・宮本徳昭 「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑窯」『松江考古第8号』 松江考古学談話会 1992年12月

折原峠遺跡

第2章 折原峠遺跡

第1節 調査に至る経緯

本村は、松江市街地への利便性に恵まれ、そのベッドタウンとして近年急速に宅地化が進み、県下市町村の中でも高い人口増加率を示し、今後も人口の増加が見込まれている。また、近年における生活水準の向上等により生活用水の需要は益々高まることが予想される。

八雲地区簡易水道施設は村内の水道水源として中心的な役割を果たしているが、現有する水道施設だけではこれらの状況に対応することができず、今後の需要を考えると施設の見直しは急務の状況となつた。幸い、鳥取県企業有用水供給事業から分水の承認が得られたため、新たに簡易水道施設を建設し、これと現水源と合わせて使用することで安定した生活用水の供給を行い、地域の発展と環境衛生の向上を計ることとした。

この事業に先立ち、平成5年10月20日に八雲村環境課(現在は上下水道課と住民課の一部に分かれ)から八雲村教育委員会あてに、折原簡易水道施設造成工事予定地内における埋蔵文化財有無についての照会があった。造成予定地内に周知の遺跡はなかったが、北西の同丘陵斜面には折原上堤東遺跡が位置し、この斜面はそのまま開発予定地につながっていた。このため、ひとまず遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査の結果、多数の遺物と加工段状の遺構が確認されたため、当地の小字名をとり折原峠遺跡として文化財保護法上の手続きをとった。この後、遺跡保護のための協議がなされたが、計画変更は困難との結論に達し、引き続き八雲村教育委員会が主体となり調査を行うこととなった。

第2節 調査の経過

試掘調査は、開発予定地内の任意の場所に $2 \times 5\text{ m}$ トレンチ3個、 $2 \times 2\text{ m}$ トレンチ2個を設定し、平成6年5月23日より掘削作業に取りかかった。調査地は用地未買収であったため、各地権者から発掘調査の承諾書を頂いた。必要が認められた場合は隨時試掘トレンチを拡幅・増設したが、立竹木補償の関係上、大きな立木は避けたため、思うような場所にトレンチを設定できないものもあった。最終的には $2 \times 7\text{ m}$ トレンチ1個、 $2 \times 5\text{ m}$ トレンチ3個、 $2 \times 2\text{ m}$ トレンチ4個の計8個のトレンチを設定している。

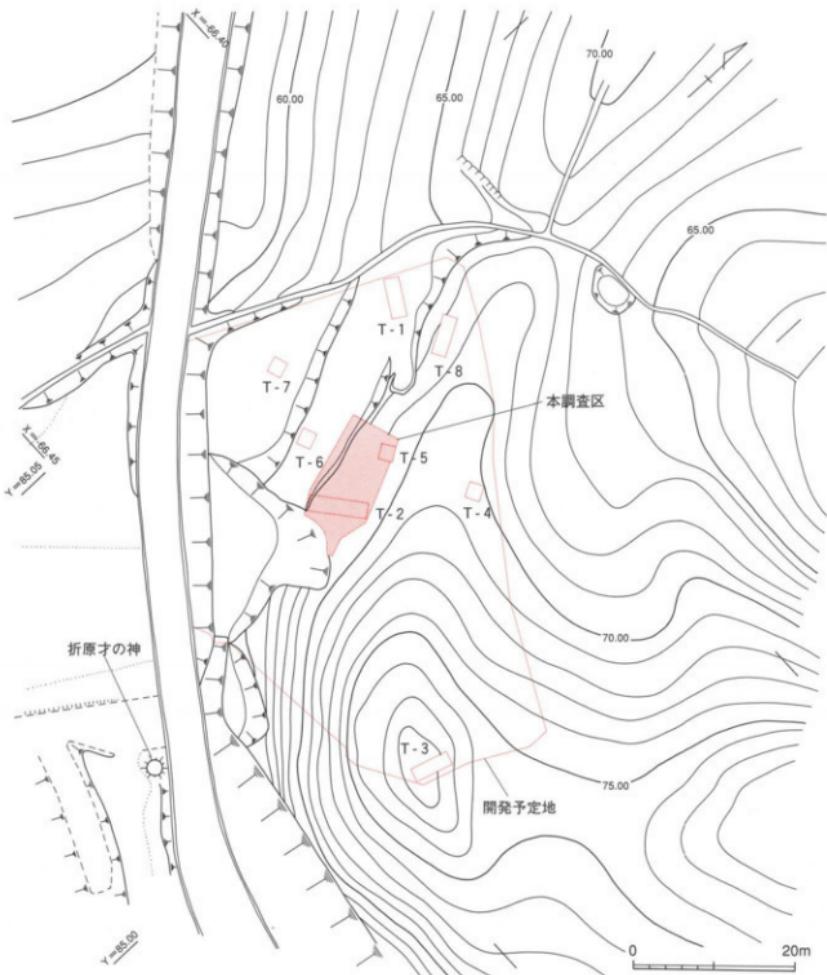
本発掘調査は範囲確認調査の結果を基に調査区を決定し、平成6年7月15日に立木を伐採する事から始めた。この後、7月19日に工事用基準杭を利用して直線を設け、これと直交するように $10 \times 10\text{ m}$ の方眼を組み、グリッドの設定を行った。次に、上層観察用の畦を設定し、掘削作業を開始した。随時遺構の精査・実測作業を行い、8月4日に全体写真的撮影、8月5日に地形測量を行い現地での調査を終了した。

なお、この年は記録的な猛暑で、現地調査中に雨の日は疎か曇った日もなく、遺構の精査、写真撮影は困難を極めた。土が極端に乾燥しているため、山の下にある溜池からバケツリレーで水を撒きながらの作業であった。また、開発予定地は用地買収が終了していなかったため、調査区周辺の立木を伐採することができず、木立の中での作業であった。このため写真撮影の際にどうしても木の影が映ってしまい不明瞭な写真となっている。

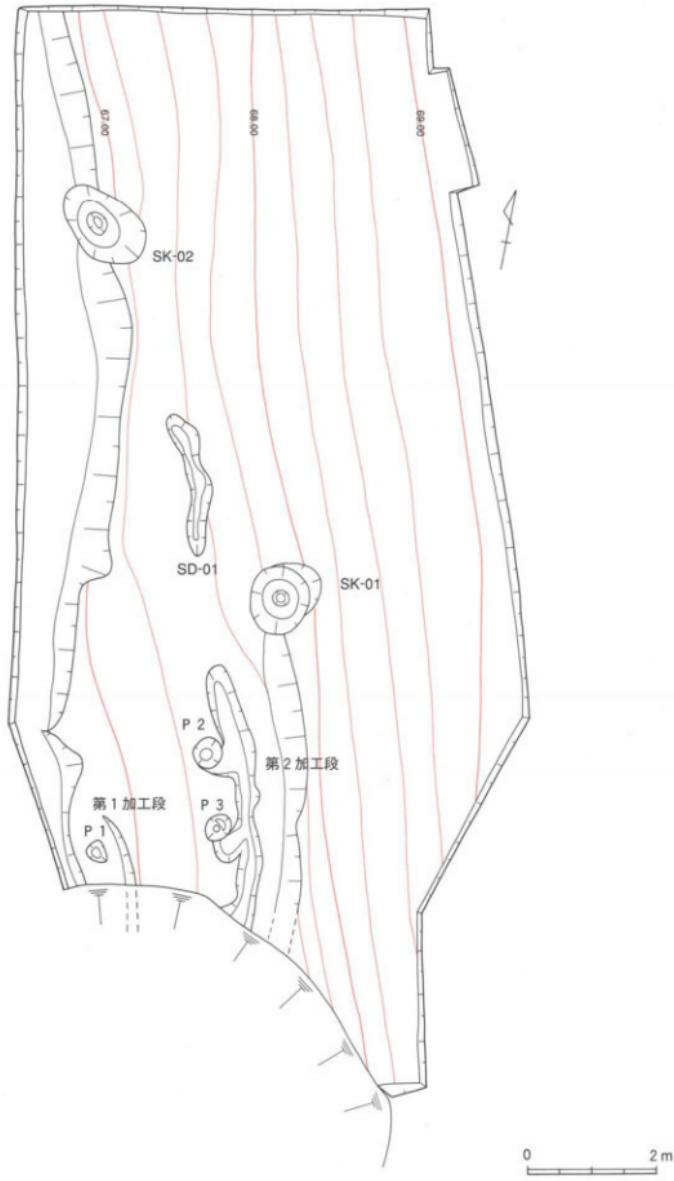
第3節 遺跡の概要

今回の調査では、丘陵西向きの緩斜面から加工段2段(第1・第2加工段)、落とし穴2個(SK-01・02)、溝状造構1本(SD-01)を検出した。

調査地の南側から西側にかけては、後世において畑地造成や土の採掘により掘削を受け、原形を留めていないが、第2加工段の検出状況から遺跡は更に南西方向に続いていると考えられる。また、当地は家畜の墓として利用されていたため、地表面や覆土中から多数の牛骨が採取され、擾乱を受けた場所も一部にみられた。



第3図 調査区配置図 (1 : 600)



第4図 遺構位置図 (S = 1 / 75)

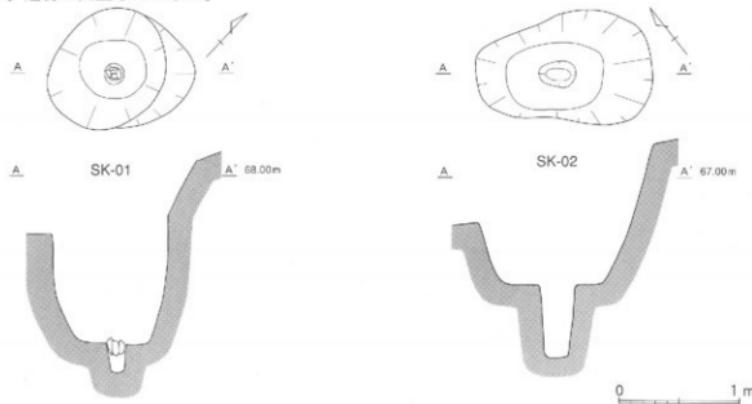
1. 落とし穴

SK-01(第5図) 調査区の標高67.50~68.25mを測る位置で検出されたものであり、西側の一部は第2加工段により削られていた。新旧関係はSK-01(古)ー第2加工段(新)である。

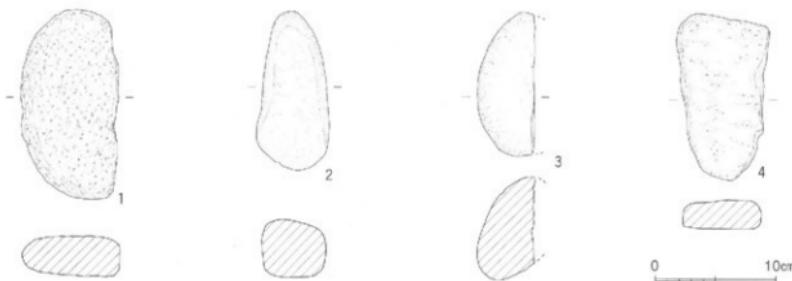
平面形は上部が円形、底部が隅丸方形を呈し、平坦な底部から壁は急角度に立ち上がり一部は胴張り状になっている。現状での規模は上縁部径105cm、底部径54cm、底部から肩部までの深さ最大150.9cmを測る。底部中央には直径17cm、深さ最大23.9cmの穴が掘り込まれている。

出土遺物としては、底部中央に掘り込まれた小穴から細長い自然石4個が差し込まれた状態で出土した。おそらく中央の穴に入れた棒を固定するために差し込まれたものと考えられる。

SK-02(第5図) 調査区の標高66.75~67.50mを測る位置で検出されたものであり、西側の一部は畠地の開墾により削られている。平面形は精円形を呈し、平坦な底部から逆台形状に立ち上がる壁面をもつ。現状での規模は上縁長軸145cm・短軸85cm、底部長軸79cm・短軸54cm、底部から肩部までの深さ最大119.3cmを測る。底部中央には、長軸30cm、深さ最大59.3cmを測る楕円形の小穴が掘り込まれている。遺物は出土していない。



第5図 落とし穴SK-01・02実測図 (S=1/30)



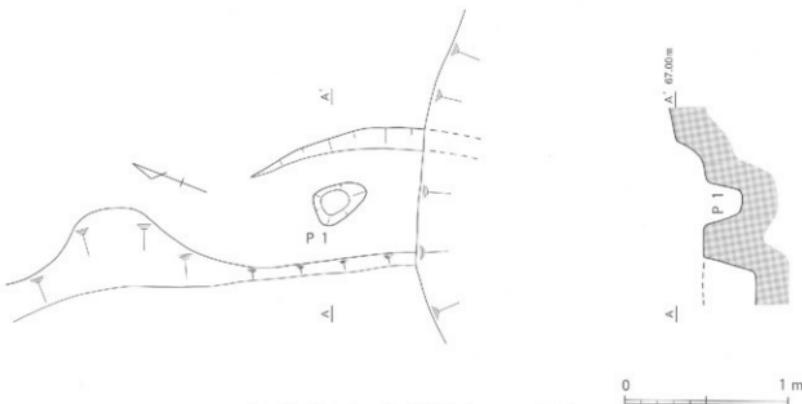
第6図 落とし穴SK-01出土自然石実測図 (S=1/4)

2. 加工段

第1加工段(第7図) 調査区の標高66.75~67.00mを測る西向きの斜面で検出されたものであり、第2加工段の平坦面と切り合う格好で位置するが、新旧関係を捉えることはできなかった。現地調査時には第2加工段に伴うものとして取り扱っていたが、しっかりとした加工段であることや、第1加工段のピット検出面と第2加工段のピット検出面での標高が53.7cm違うことから、ここでは第2加工段とは別個の遺構として取り扱った。

加工段は斜面上となる東側を断面L字状にカットして平坦面を設けており、平坦面での標高は66.80~66.90mを測る。壁面は、第2加工段の壁面とはほぼ同じく南一北方向に向かって伸びているが、南側と西側は後世に土の採掘が行われ、平坦面共に消失している。現状での規模は、長さ1.08m、壁の高さは残りの良いところで最大17.9cmを測る。

加工段下の平坦面からはピット1個(P1)を検出している。P1は平面形は隅丸の三角形を呈し、現状での規模は上縁最大長33cm、深さ最大23.7cmを測る。遺物は出土していない。

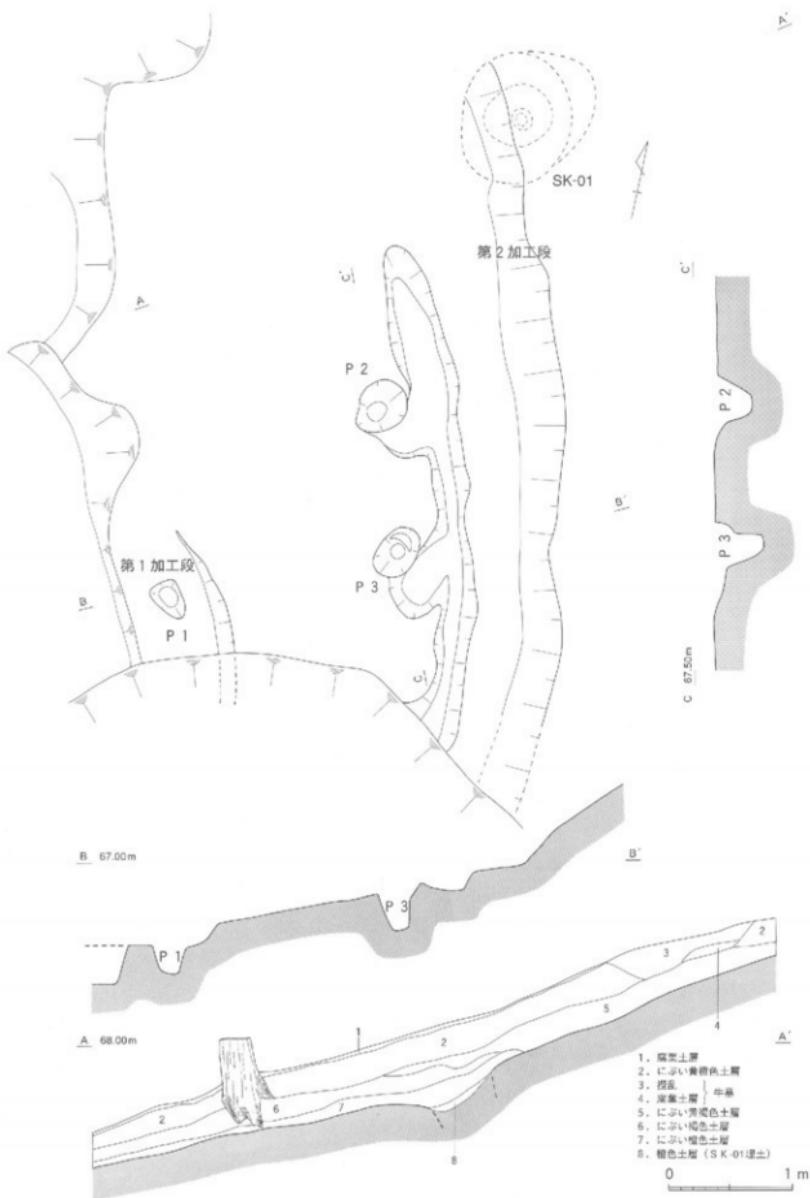


第7図 第1加工段実測図 ($S = 1/30$)

第2加工段(第8図) 調査区の標高67.00~67.75mを測る西向きの斜面で検出されたものであり、斜面上となる東側を断面L字状にカットして平坦面を設けている。この加工段はコンターラインに沿つて、南一北方向に向かって伸びているが、南側は後世に土の採掘が行われ、平坦面共に消失している。現状での規模は、長さ4.47m、壁の高さは残りの良いところで最大35.6cmを測る。

平坦面からは、溝とピット2個(P2・P3)を検出した。規模はP2が上縁径38~47cm、深さ最大26.2cm、P3が上縁径31~44cm、深さ最大38.7cmを測る。ピット間の心心距離は1.16mを測る。溝は壁下から34~54cm離れた場所に位置し、この溝と平行に伸びるものである。現状での規模は長さ3.8m、幅19~44cm、深さ最大10.3cmを測る。また、この溝とピットは幅42~45cmを測る溝によりつながっている。

加工段の埋土からは多数の遺物が出土したほか、壁下の床面に密着した状態で弥生時代後期中葉の草田2期に含まれる甕1点(第10図5)が出土している。



第8図 第2加工段実測図 ($S=1/40$)

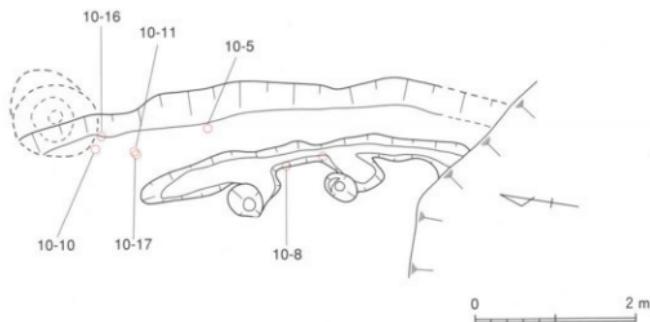
第2加工段床面出土遺物(第10図5) 5は壺口縁部の破片である。複合口縁部の稜はあまり突出せず、外面のみがゆるやかにカーブをもって外湾し、端部を丸くおさめる。調整は口縁部外面に貝殻腹縁によると考えられる櫛状工具で10本の擬凹線が施されるが、直線にならずややくねっている。また、口縁部内面にはミガキ、頭部以下にはヘラケズリが施されている。法量は復元口径19.2cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。

第2加工段埋土出土遺物(第10図6～17) 第10図6～13は壺口縁部の破片である。6・7は複合口縁部の稜はあまり突出せず、外面のみがゆるやかにカーブをもって外湾し、端部を丸くおさめるものである。調整は口縁部外面に貝殻腹縁によると考えられる櫛状工具で擬凹線が施されている。また、口縁部内面にはミガキが施されている。複合口縁部の稜から口縁端部までの立ち上がりが若干短いが、形態的には床面出土の第10図5と同様のものである。法量は6が口径17.5cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。第7層から出土した。7は口径17.8cmを測り、色調は黄橙色を呈する。第6層から出土した。8は口縁部の外面のみが緩やかにカーブをもって外湾するものである。頭部は短く屈曲し、厚さが0.9～1.2cmとやや厚い。調整は口縁部外面に細かく間隔の狭い擬凹線が施されており、頭部以下にはヘラケズリによる砂粒の動きが観察できる。口径は端部を欠くため判然としないが、22cm前後のものである。色調はにぶい黄橙色を呈する。第7層より出土した。9は複合口縁部の稜はあまり突出せず、口縁部が緩やかにカーブをもって比較的長く伸び、端部を丸くおさめる。調整は内面の一部にミガキが認められ、外面は風化が著しく不明であるが、擬凹線をもつものかもしれない。法量は口径16.1cmを測る。第6層より出土したものであり、色調は黄橙色を呈する。10は口縁は真っ直ぐに立ち上がり中途で緩く外反し、端部は丸くおさめる。調整は風化が著しい複合口縁部の稜直上に2条の平行凹線が認められる。口径は19.6cmを測る。第7層より出土したものであり、色調はにぶい黄橙色を呈する。11は複合口縁部の稜が斜め下方に向かって突出し、口縁は真っ直ぐに立ち上がり、中途で折り曲げられ外方向に引き出されている。調整は風化が著しく不明である。口径は16.4cmを測る。第7層より出土したものであり、色調は明黄褐色を呈する。12は複合口縁部の稜は僅かに斜め下方方向に伸び、口縁は均一な厚さをもってやや外反して立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は風化が著しく不明である。口径は20.1cmを測る。第6層より出土したものであり、色調は明黄褐色を呈する。13は複合口縁部の稜は横方向に向かって僅かに突出し、口縁は斜上方にほぼ真っ直ぐに立ち上がる。調整は内面頭部以下にヘラケズリが施され、肩部外面には僅かに波打ちのある平行線文が観察できる。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。第6層より出土したものであり、色調はにぶい黄橙色を呈する。

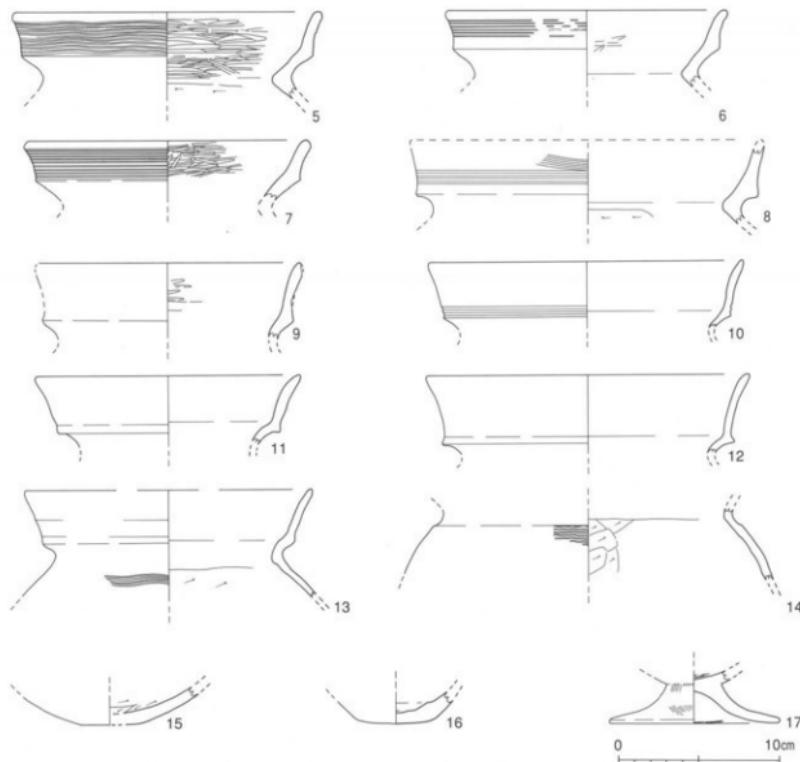
第10図14は第6層より出土した壺壺類肩部の破片であり、色調は橙色を呈する。外面は櫛状工具により振幅の小さく小刻みな波形文が観察でき、内面にはケズリが施されている。

第10図15・16は第6層より出土した壺壺類底部の破片であり、小さな平底をもつ。15は復元底径3.4cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。調整は底部内面にヘラケズリによる砂粒の動きが観察できる。16は復元底径4.8cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。

第10図17は第6層より出土した底脚坏脚部の破片であり、色調は橙色を呈する。そぞが水平に近く大きく開き、端部は丸くおさめる。調整は坏部内面がヘラミガキ、脚部外面と内面の端にハケメが施されている。法量は復元底径10.6cmを測る。



第9図 第2加工段遺物出土状況実測図 ($S = 1/60$)



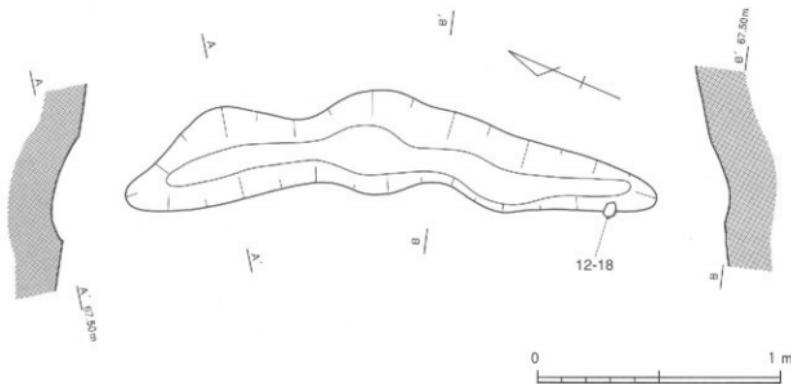
第10図 第2加工段床面及び埋土出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

3. 溝状遺構

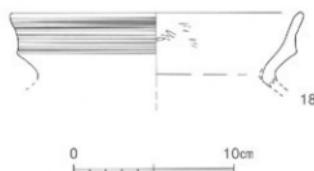
SD-01(第11図) 調査区の標高67.25~67.75mを測る西向きの緩斜面で検出された溝状の遺構である。南一北に向かってやや弧を描いて伸びるものであり、第2加工段平坦面から検出された溝とはほぼ同一直線上に位置する。しかし、第2加工段床面での標高とSD-01検出面での標高を比べると、SD-01検出面での標高が22.2cmほど高くなっている。また、加工段が伸びていないことからここでは別個の遺構として取り扱った。溝底部でのレベルは南側が67.50m、北側が67.47mを測り、南側から北側に向かって若干傾斜がついている。規模は、長さ2.16m、幅22~43cm、深さ最大17.7cmを測る。

遺物としては埋土中から弥生土器壺口縁の破片が1点出土している。

SD-01出土遺物(第12図18) 第12図18はSD-01埋土中より出土した壺口縁部の破片であり、色調はにぶい黄橙色を呈する。複合口縁部の稜はあまり突出せず、外面のみがゆるやかにカーブをもって外湾し、端部は丸くおさめる。調整は、口縁部外面に貝殻腹縁によると考えられる櫛状工具により10本の擬凹線が施されている。また、口縁部内面にはヘラミガキが施されている。法量は口径18.3cmを測る。第2加工段床面から出土した壺(第10図5)と同様の形態をもつものである。



第11図 SD-01実測図 (S=1/20)



第12図 SD-01出土遺物実測図 (S=1/3)

4. 遺構外出土遺物(第14図19~30)

折原軒遺跡では遺構外からも多数の遺物が出土しており、ここではこのうちの12点を掲載した。遺構外出土遺物の大部分は、第2加工段南側の第2層に於いて黄橙色土層から出土したものであり、これは土器溜りとなっていた。

第14図19~22は壺口縁部分の破片である。19は複合口縁部の稜はあまり突出せず、外面のみが緩やかにカーブをもって外湾し端部は丸くおさめる。調整は、口縁部外面に貝殻腹縁によると考えられる備状工具で11本の擬凹線が施されるが、内面は風化のため不明である。法量は復元口径18.4cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。第2加工段南側の土器溜りより出土した。20は口縁は僅かに外方に向かって立ち上がり、端部は丸くおさめる。頭部は1.2~1.5cmとやや厚めである。調整は原体により擬凹線を施した後、口縁全体にヨコナデを施しているため文様が浅く不鮮明になっている。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。色調はに於いて黄橙色を呈する。第2加工段東側の地山直上より出土した。21は口縁は斜め外方に向かって真っ直ぐに伸び、端部に平坦な面をもつ。調整は内外面ともヨコナデが施され、内面頭部以下にはヘラケズリによる砂粒の動きが観察できる。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。色調は橙色を呈する。第2層から出土した。22は複合口縁部の稜は横方向に僅かに突出し、口縁は外方に向かってほぼ真っ直ぐに立ち上がる。調整は風化が著しく不明である。法量は復元口径14.9cmを測り、色調はに於いて黄橙色を呈する。第2加工段南側の土器溜りより出土した。

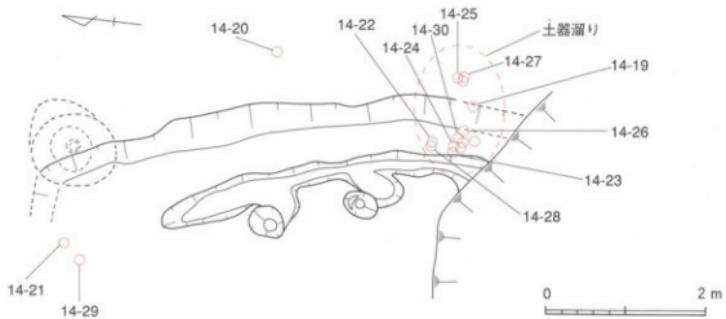
第14図23は第2加工段南側の土器溜りより出土した壺口縁部の破片であり、色調はに於いて黄橙色を呈する。薄く引き出したような口縁部が垂直に近く立ち上がり、端部は丸くおさめる。風化が著しく調整の詳細は不明であるが、外面の頭部下半に縱方向のハケメを施す。法量は復元口径14.0cmを測る。24は23と寄り添うように出土した壺頭部の破片であり、色調はに於いて黄橙色を呈する。調整は肩部外面に縱方向のハケメと平行線文、内面の頭部には指頭圧痕が残り、下半より下にはヘラケズリが施される。胎土、色調、出土状況などから23と同一個体と考えられる。

第14図25~27は高杯であり、いずれも第2加工段南側の土器溜りより出土した。25は受部の破片で、色調は橙色を呈する。口径の割には浅い坏部をもつ個体と考えられ、底部に充填していた円盤がはずれた痕跡が残る。調整は内外面ともにミガキが施される。26は口縁部の破片で、色調はに於いて黄橙色を呈する。口径の割に浅い坏部を持つものであり、口縁部付近で緩く外反し、端部を丸くおさめる。口径は小片のため不明である。27は脚部と受部の接合部分の破片である。接合には円盤を充填させたもので、円盤中央部分に刺突痕をもち、色調はに於いて黄橙色を呈する。胎土、焼成、色調などから26と同一個体と考えられる。

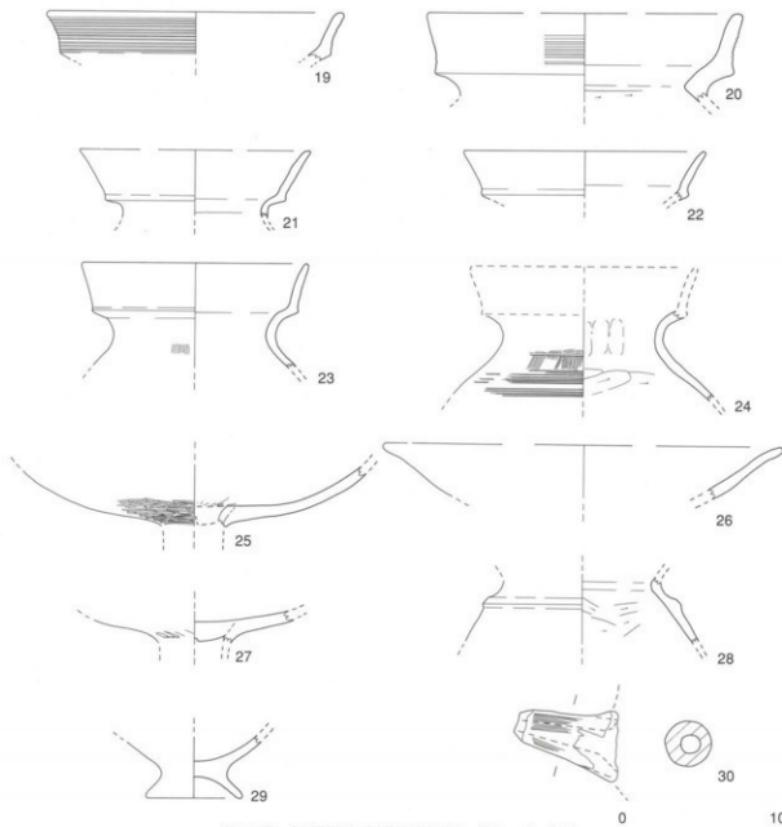
第14図28は縮約された筒部をもつ鼓形器台下半の破片である。調整は風化が著しく詳細は不明であるが、内面にヘラケズリによる砂粒の移動が観察できる。第2加工段南側の土器溜りより出土したものであり、色調は橙色を呈する。

第14図29は地山に近い位置より出土した底脚坏脚部の破片であり、色調はに於いて黄橙色を呈する。「ハ」の字に開く脚部をもつもので、復元底径5.9cmを測る。

第14図30は注口土器の破片であり、第2加工段南側の土器溜りより出土した。調整は外面に間隔の狭いハケメが施され、一部に煤が付着する。取り付け部分には体部との接合に使われた粘土の痕跡が認められる。色調は黄橙色を呈する。



第13図 遺構外遺物出土状況実測図 ($S = 1 / 60$)



第14図 遺構外出土遺物実測図 ($S = 1 / 3$)

第4節　まとめ

今回の折原跡遺跡の調査では、丘陵西向きの緩斜面から、落とし穴2個(SK-01・02)、加工段2段(第1・第2加工段)、溝状遺構1本(SD-01)を検出した。ここでは遺構の時期について若干触れ、まとめてみたい。

落とし穴は標高66.75～68.25mを測る緩斜面に位置する。遺物としてはSK-01の底部中央に掘られた小ピットから石4個が差し込まれた状態で出土している。しかし、石には加工痕等ではなく、他に遺物もないことから時期については不明と言わざるをえない。但し、第2加工段はSK-01を切って作られており、これよりは古いものである。

次に、第2加工段であるが、標高67.00～67.75mを測る西向きの斜面で検出されたものであり、南北に伸びる。この南と西側は後世の掘削により平坦面、塁共に消滅している。床面からは草田2期(弥生時代後期中葉)^{注4}の中でもやや新しい様相を呈する壺口縁部の破片が1点出土した。

最後にSD-01は調査区の標高約67.25～67.75mを測る緩斜面で検出された溝状の遺構である。南北に向かって伸びるもので、第2加工段平坦面の溝とはほぼ同一直線上に位置している。しかし、微妙に傾斜が付いていることや、加工段が伸びていないことから別個の遺構として取り扱った。遺物としては第2加工段の床面から出土したものと同形態の壺が出土しており、時期は草田2期の中でもやや新しい段階と考えられる。

以上、折原跡遺跡について概観した。北西側に近接する折原上堤東遺跡第II調査区からは弥生時代後半の竪穴住居跡が5棟みつかっており、更に谷を挟んだI区からは古墳時代中期の竪穴住居跡5棟が検出されている。今回の折原跡遺跡は弥生時代後期中葉の遺構を中心であり、時代の移り変わりと共に集落が北西へと移動しており興味深い。遺跡の南と西側は後世の開墾により消滅しているが、折原上堤東遺跡の位置する北西側へと緩斜面が続き、遺跡は更に広がっているものと考えられる。

[註]

- 註1 丹羽野裕氏のご教示による。(P-12)
- 註2 赤沢秀則「1.出土遺物・時期」「南講武草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5」鹿島町教育委員会 1992年3月 (P-13)
- 註3 中川寧氏のご教示による。(P-20)
- 註4 『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1994年3月 (P-20)

折原中堤遺跡

第3章 折原中堤遺跡

第1節 調査に至る経緯

八雲村は商工業地域のベッドタウンとして近年急速に人口が増加しているが、交通条件・就労場・レクリエーション施設等、定住環境整備の立ち遅れなどにより若者層に限ってみるとその構成比は年々減少傾向にある。また、自家用車の普及や屋内就業の増加、生活様式・就労状況の変化は運動機会の減少をもたらしている。これに対処するために、八雲村では平成4年度に引き続きウルグアイ・ラウンド農業合意関連対策山村振興等農林漁業特別対策事業の一環として、折原地区に中央公園を整備し、山村地域の活性化を図ることとした。

この事業に先立ち、平成5年10月20日、八雲村産業課から八雲村教育委員会あてに中央公園整備予定地内における埋蔵文化財有無についての照会がなされた。造成予定地内に周知の遺跡は存在しなかつたが、予定地が折原上堤東遺跡の真向かいにあたることや、付近に折原跡、折原下堤跡、禪定寺古墳群、北折原遺跡が存在する遺跡の密集地であることから、ひとまず遺跡の有無を確認するための試掘調査を行うことになった。

平成6年9月22日から10月12日に実施した試掘調査により、工事予定地頂上部(第15図T-12)と丘陵斜面(T-2)から竪穴住居跡と考えられる遺構を検出したため、ここを折原中堤遺跡として文化財保護法上の手続きをとった。

この結果をふまえて、10月13日に島根県教育庁文化課(現在の文化財課)、八雲村産業課、八雲村教育委員会との三者で遺跡保護の協議がなされ、丘陵斜面(T-2)から検出された住居跡の周囲については緑地帯として現状のまま保存して頂くこととなり、計画変更が不可能な頂上部(T-12)の周囲を、平成6年12月から八雲村教育委員会が主体となり調査を行うこととなった。

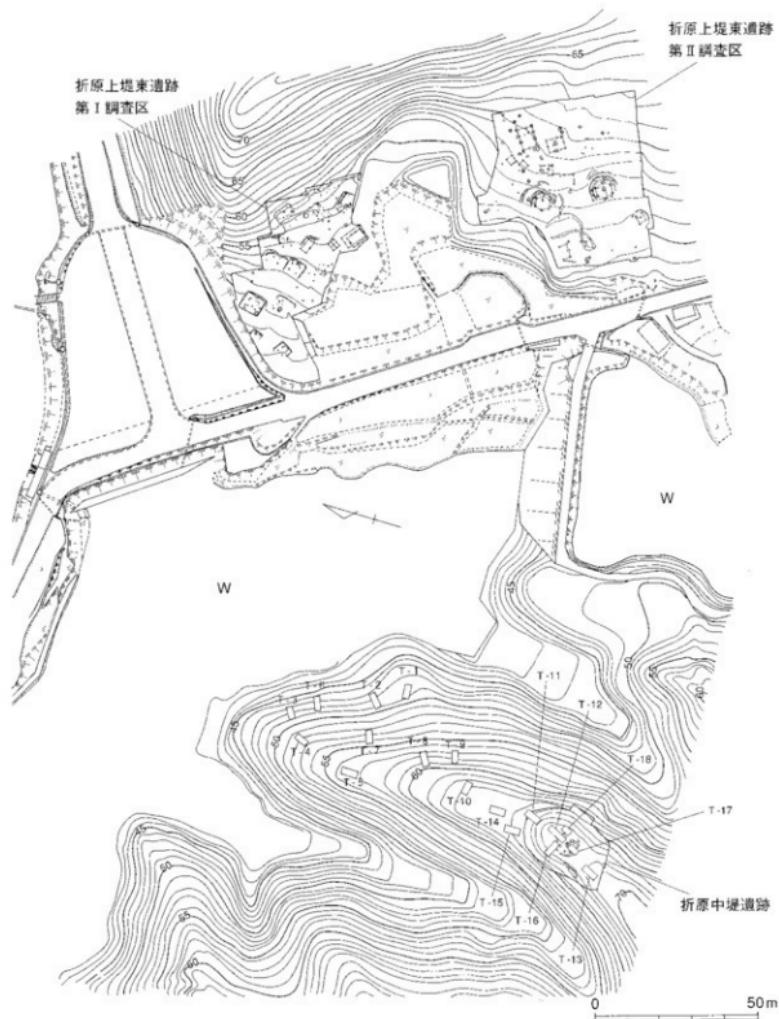
第2節 調査の経過

試掘調査は開発予定地内の任意の場所に $2 \times 5\text{ m}$ トレンチ15個を設定し、平成6年9月22日より掘削作業に取りかかった。調査地は用地未買収であったため、各地権者から発掘調査の承諾書を頂いてからの作業であった。必要が認められた場合は随時試掘トレンチを拡幅・増設したが、立竹木補償の関係上、大きな立木は避けたため、思うような場所にトレンチを設定できないものもあった。最終的には $2 \times 6\text{ m}$ トレンチ1個、 $2 \times 5\text{ m}$ トレンチ15個、 $2 \times 3\text{ m}$ トレンチ2個の計18個のトレンチを設定している。

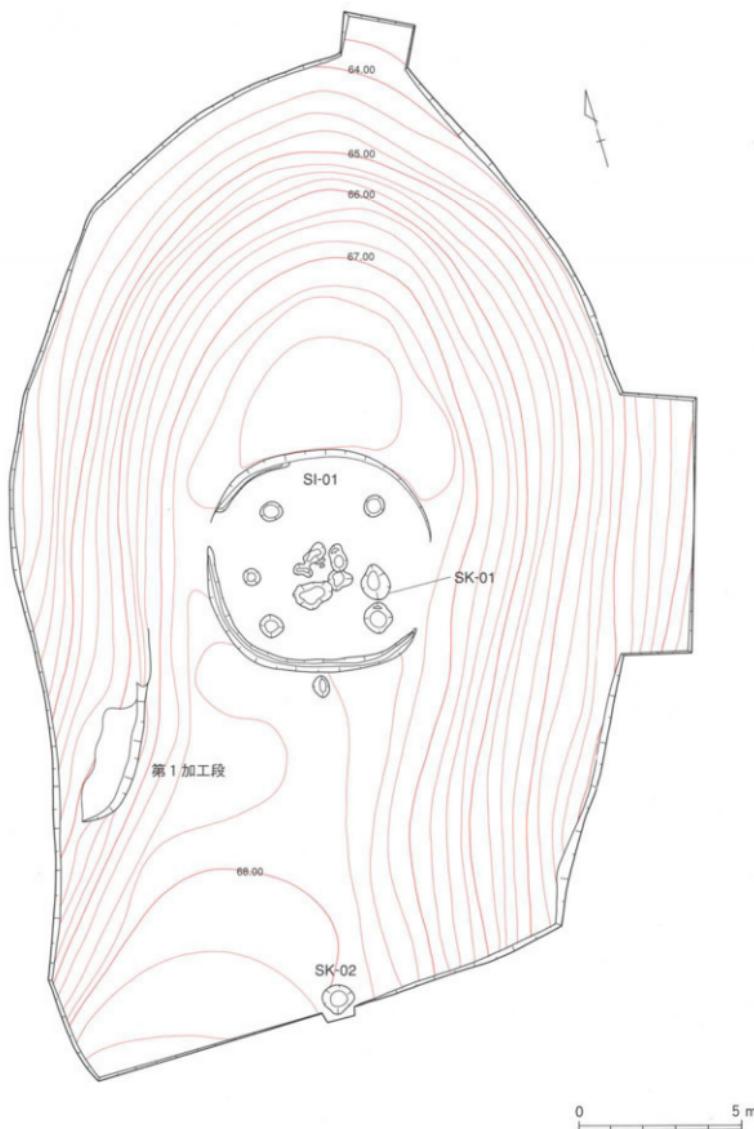
本発掘調査は範囲確認調査の結果及び取り扱い協議結果を基に調査区を決定し、土層観察用の畦を設定したのち12月1日から掘削作業を開始した。この後、12月16日に八雲村産業課より「工期の関係上、調査区以外の開発予定地については工事に着手したい。また、これにより工事予定地内となる場所に建っているプレハブ事務所を移転して欲しい。」という要望があった。協議により『1. 行き帰りの作業道を確保すること。2. 行き帰りの時間帯は工事を休止すること。3. 安全面には十分な配慮を行うこと。4. プレハブは事業課の費用で移転すること。』との条件で工事に着手することへの了解をした。随時遺構の精査・実測作業を行い調査を進め、平成7年1月10日に全体写真の撮影、1月12・13日に地形測量、1月18日に撤収作業を行い現地での調査を終了した。

第3節 遺跡の概要

今回の調査では、尾根の頂上部とその周辺から堅穴住居跡1棟(SI-01)、加工段1段、焼土坑2個を検出した。ここは尾根頂上の突端部分であるため見晴らしが良く、折原下堤遺跡、北折原遺跡、折原上堤東遺跡、折原峰遺跡を見渡すことが出来る。また、後世に人の手があまり入っていなかつたため、試掘調査時に住居跡が丸く窪んでいるのを観察することが可能であった。



第15図 調査区配置図 (1:1,500)



第16図 遺構位置図 ($S = 1 / 150$)

1. 堅穴住居跡SI-01(第17図)

調査区のほぼ中央、北に向かって伸びる尾根の頂部より検出された平面が隅丸方形を呈する堅穴住居跡であり、検出面での標高は67.25~67.75mを測る。遺存状態は比較的良好であるが、斜面側にある南東と西側の壁は消失している。規模は上縁部径6.6mを測り、床面積は約33.8m²である。壁面は南と北側の残りが良く、壁高最大58.3cmを測る。

住居跡の床面からは主柱穴4個(P1~P4)、特殊ピット(P5)、ピット(P6)、壁体溝、炉を検出した。また、南壁の上部と接するようにピット1個(P7)を検出したが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。このピットは上縁部が梢円形、底部が不整形を呈し、規模は上縁長軸60cm、短軸48cm、深さ最大19.6cmを測る。埋土は地山と良く似たにぶい黄褐色土層である。

主柱穴の規模はP1が上縁径61~64cm・深さ最大61.8cm、P2が上縁径62~66cm・深さ最大61.7cm、P3が上縁径60~62cm・深さ最大65.1cm、P4が上縁径76~100cm・深さ最大53.4cmを測る。その間隔は心・心距離でP1-P2間が3.50m、P1-P3間が3.18m、P2-P4間が3.36m、P3-P4間が3.44mを測る。また、P1とP2間のほぼ中央の若干壁よりに位置するピット(P6)がある。上縁径46~48cm・深さ最大41.0cmを測るしっかりしたものであり、上屋構造に関連するものと考えられる。同様のピットの配置をもつ住居跡に隣接する折原上堤東遺跡第II調査区で検出されたSI-08があげられる。

特殊ピット(P5)は、床面中央のやや東側で検出された。平面形は上縁部が隅丸長方形、底部が円形を呈し、規模は上縁長軸72cm、短軸41cm、深さ最大45.7cmを測る。埋土には粉状の炭化物が多く含まれていた。

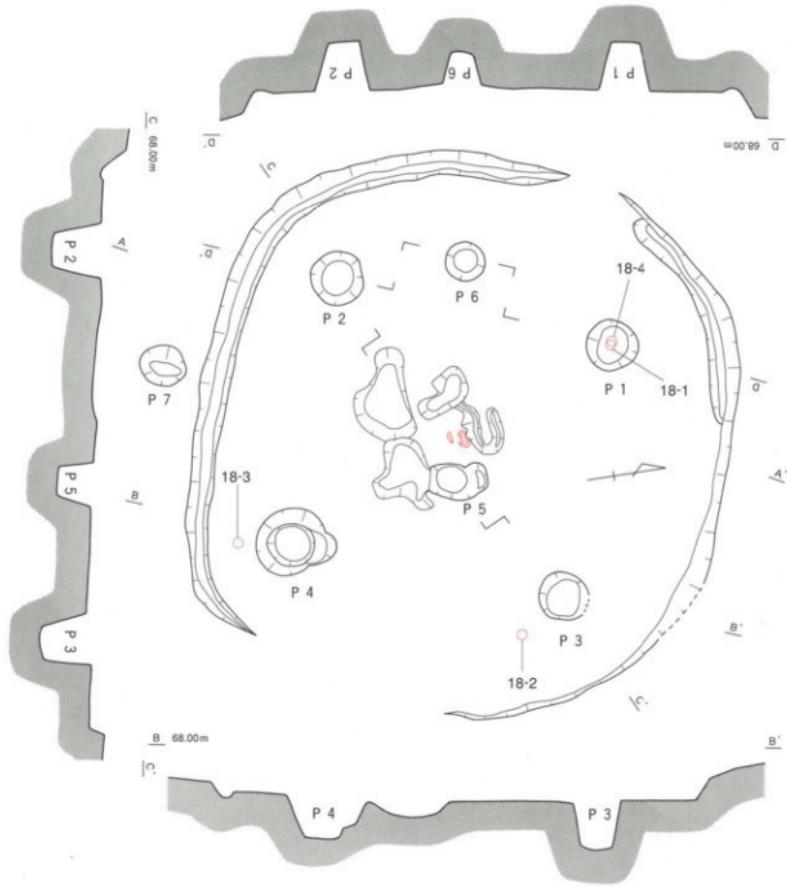
残存する周壁下からは幅10~22cm、深さ2.7~12.9cmを測る壁体溝が検出された。この溝は全周せず北西の一部と東側から北側にかけては途切れる格好になっている。断面は逆台形状を呈する。

炉は床面ほぼ中央に位置し、6×14cm、6×26cmの2ヶ所が焼け、赤変していた。炉の上部と周囲には粉状の炭化物を非常に多く含んだ黒褐色土層が堆積しており、これを取り除くと、炉を取り囲む格好で不整形の窪みが検出された。この窪みは特殊ピットと切り合っていた。

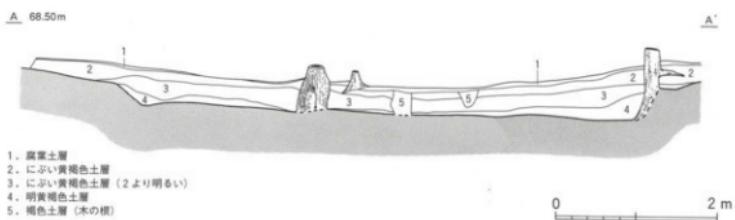
遺物には住居床面から複合口縁の壺(第18図2・3)が出土している。また、P1の埋土からは複合口縁の壺(第18図1)、平底をもつ壺類の底部(第18図4)が出土した。

SI-01床面・ピット内出土遺物(第18図1~4) 第18図1~3は壺口縁部の破片である。1はP1の埋土より出土したものであり、色調は橙色を呈する。複合口縁部の縁は斜め下方に向かって引き出され、やや厚手の口縁は緩く外反して立ち上がり端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデで、内面頸部以下にはヘラケズリが施される。法量は復元口径21.4cmを測る。2は床面より出土したものであり、色調は明黄褐色を呈する。複合口縁部の後はやや斜め下方に突出し、口縁は均一な厚みで斜め上方に向かって真っ直ぐに立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデが施される。法量は復元口径15.4cmを測る。3も床面より出土したものであり、色調はにぶい黄橙色を呈する。やや短めの複合口縁が斜め上方に真っ直ぐに開き、端部は先細りとなっている。調整は内外面ともヨコナデが施される。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。

第18図4はP1より出土した壺類底部の破片であり、色調は黄褐色を呈する。丸底に近いが僅かに平底の痕跡を留めるもので、底径は約1.2cmを測る。調整は内面にヘラケズリによる砂粒の移動が観察でき、外面の一部にはハケメが施されている。



赤枠部は焼土を示す。

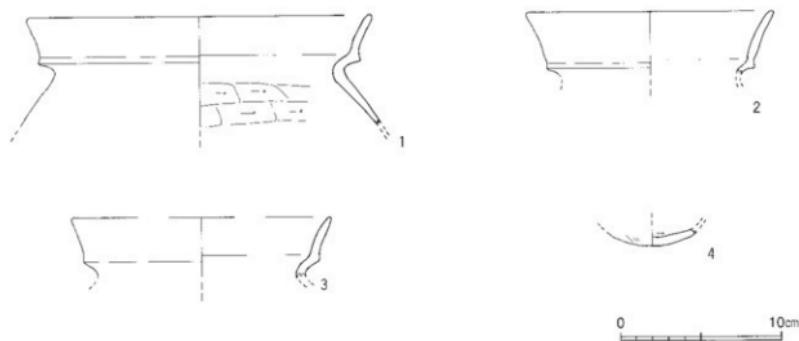


第17図 壁穴住居跡SI-01実測図 (S = 1/60)

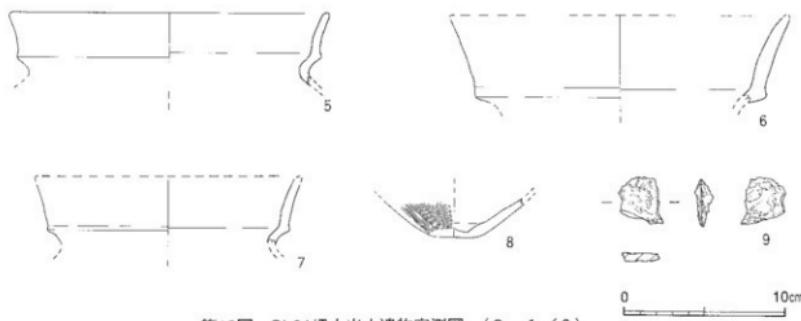
SI-01埋土出土遺物(第19図5～9) 第19図5～7は壺口縁部の破片である。5は第3層に於いて黄褐色土層より出土したものであり、色調は橙色を呈する。複合口縁部の稜は横方向に突出し、口縁はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデで、内面頭部以下にヘラケズリが施される。法量は復元口径19.8cmを測る。6は第3層より出土したものであり、色調は橙色を呈する。厚手の口縁が緩く開き気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデが施される。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。7は第3層より出土したものであり、色調は橙色を呈する。複合口縁部の稜は横方向に突出し、口縁は斜め上方に向かってほぼ真っ直ぐに開く。調整は外面がヨコナデで、その他は風化のため不明である。法量は口縁端部を欠くため復元は不正確ではあるが、16cm前後のものである。

第19図8は第3層より出土した壺底類底部の破片であり、色調はにぶい黄褐色を呈する。僅かに半底の痕跡を留めるものであり、底径は2.5cmを測る。内面にはヘラケズリが施されており、器壁が非常に薄く、外面には細かな縱方向のハケメが観察できる。

第19図9は第3層より出土した鉄片である。刃部のような特徴的な箇所ではなく、性格は不明と言わざるを得ない。長さ2.9cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm、重量5.7gを測る。



第18図 SI-01床面・ピット内出土遺物実測図 (S=1/3)



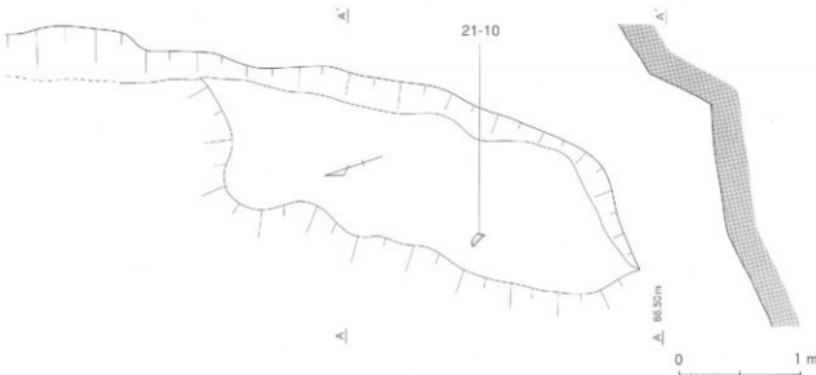
第19図 SI-01埋土出土遺物実測図 (S=1/3)

2. 加工段 (第20図)

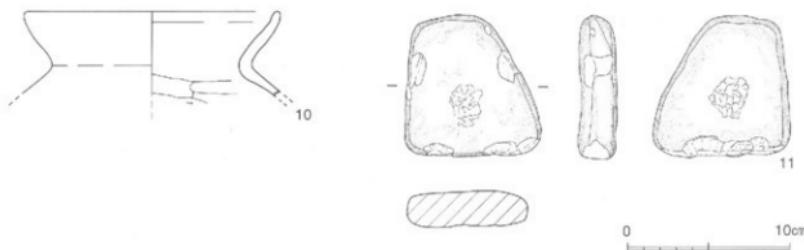
調査区の南西、尾根上の平坦面からやや下に降りた急斜面にあり、標高66.00~66.75mを測る場所で検出された。山の斜面を断面しU字型にカットして平坦面を作り出しているが、斜面下側となる西側の平坦面は消失している。コンターラインに沿って南西-北東方向に伸びるものであり、残存する規模は壁の長さ4.5m、比高差最大49.0cm、平坦部の面積約4.04m²を測る。遺物としては埋土中より甕(第21図10)と凹石(第21図11)が出土した。

加工段出土遺物(第21図10・11) 第21図10は加工段平坦部から10cmほど浮いた位置より出土した甕口縁部の破片であり、色調は橙色を呈する。単純な口縁部が直線的に開いた後、僅かに内湾し端部内面に括れをもつ。調整は口縁部内外面はヨコナデで、内面の頸部以下にはヘラケズリが施されている。法量は復元口径15.6cmを測る。

第21図11は加工段の埋土中から出土した凹石である。台形状を呈する扁平な自然石が使用されており、表裏の平坦面が利用され中央部が窪む。両側面と下部にも摩滅したような窪みがあり、凹石とは別の用途も考えられる。法量は長さ8.75cm、幅4.50~8.45cm、厚さ最大2.3cm、重量205.0gを測る。



第20図 第1加工段実測図 (S=1/40)



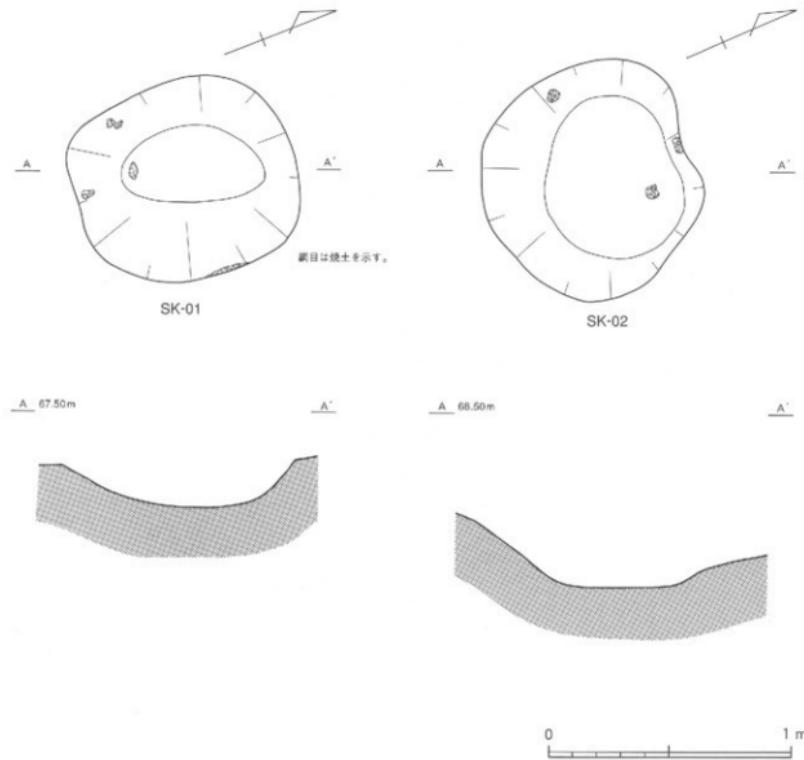
第21図 第1加工段出土遺物実測図 (S=1/3)

3. 焼土坑

SK-01(第22図) SI-01と切り合う格好で検出された不整形を呈する焼土坑であり、新旧関係はSI-01(古)－SK-01(新)である。SI-01の埋土掘削時に腐葉土層を取り除いた時点で土坑を確認したが、住居床面まで掘り下げた段階で精査をしたため深さは最大で25.3cmと浅い。規模は上縁長軸96cm、短軸82cmを測る。壁面は熱を受け、所々に赤褐色の焼土が残る。埋土は非常に軟らかい褐色土層であり、底部には薄く炭化物を多く含んだ黒色土層が堆積していた。

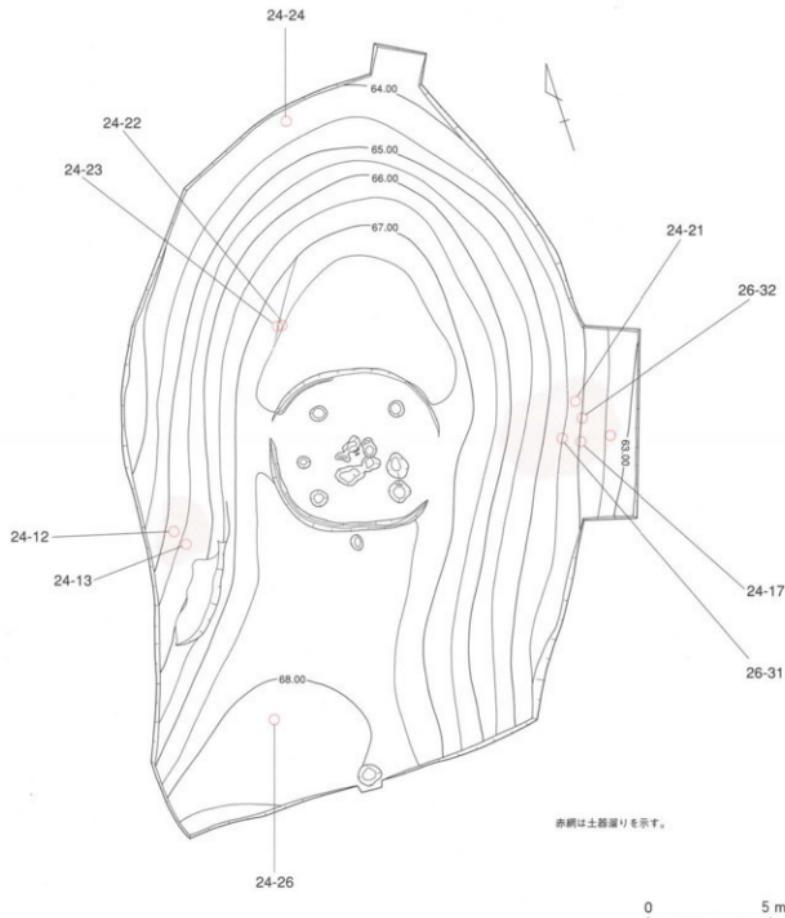
SK-02(第22図) SI-01の南側、尾根上の平坦面に位置し、標高67.75～68.00mを測る場所で検出された。平面は不整形であり、規模は上縁長軸90cm、短軸80cm、深さ最大44.3cmを測る。壁面は熱を受けたと考えられ、所々に赤褐色の焼土が残る。埋土はSK-01と同じように非常に軟らかい褐色土層であり、底部には薄く炭化物を多く含んだ黒色土層が堆積していた。

これらの焼土坑からは遺物が出土していないことから時期は不明と言わざるを得ない。埋土は非常に軟弱なものであり、恐らく小炭焼きに関連した土坑と思われる。同様の土坑は宮谷遺跡をはじめとして村内の数多くの遺跡から検出されている。



4. 遺構外出土遺物 (第24図12~第27図39)

遺構外から出土した遺物の大部分は、SI-01南東側の急斜面からであった。ここは土器溜りとなつておらず、複合口縁をもつ甕口縁部(16~21)、平底の甕底部(27~29)、壺形土器(32・33)、鉢形土器(37)、器台(35)、不明鉄器(39)が出土した。この南東側急斜面から出土した遺物は、弥生時代後期後半に含まれるものであり、SI-01の床面出土の遺物とほぼ同時期のものである。恐らくSI-01より廃棄されたか流れ込んだものと考えられる。



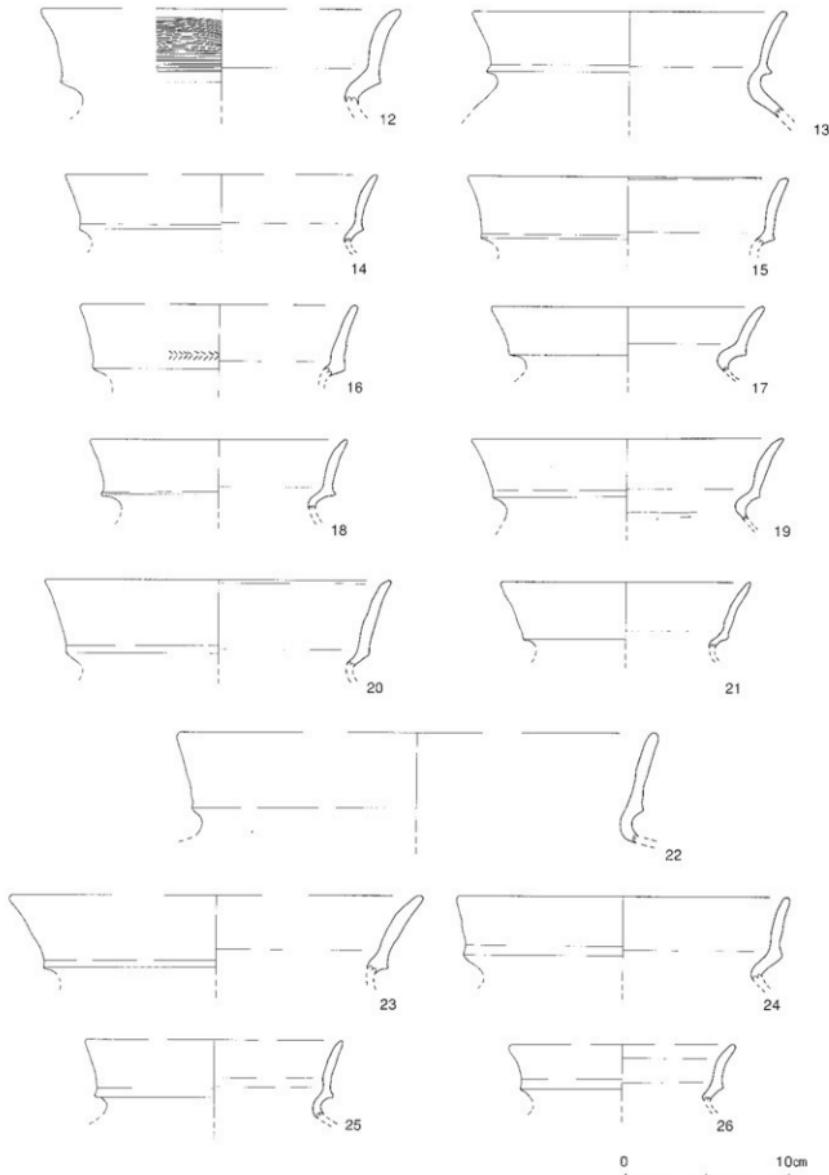
第23図 遺構外遺物出土状況実測図 (S = 1/200)

第24図12～26は壺口縁部の破片である。このうち12～15は加工段北側(SI-01の西側)の急斜面より出土した。12は複合口縁部の稜が横方向に突出し、口縁は外反して立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は口縁部外面に間隔の狭い擬凹線文が施されている。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。色調は明赤褐色を呈する。13は複合口縁部の稜が横方向に引き出され、口縁は均等な厚さで斜め上方にほぼ真っ直ぐに立ち上がり、端部は平坦に仕上げられている。調整は内外面共にヨコナデが施される。法量は復元口径19.2cmを測り、色調は明黄褐色を呈する。14は複合口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は内外面共にヨコナデが施されている。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。色調は橙色を呈するが、外面の一部には煤が付着し黒褐色を呈する。15は複合口縁部の稜が横方向に突出し、口縁は均等な厚さでほぼ真っ直ぐに立ち上がり、端部に平坦な面をもつ。調整は内外面共にヨコナデが施されている。法量は復元口径19.6cmを測り、色調は橙色を呈する。

第24図16～21はSI-01南東の急斜面より出土したものである。16は複合口縁部はほぼ真っ直ぐに伸び、その厚みは先端へ向かうほど薄くなり、端部は丸くおさめる。調整は突出部の上に密接した2段の列点文が施されるが、その他は風化が著しく不明である。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。色調は橙色を呈する。17は複合口縁部の稜は斜め下方に引き出され、口縁はやや外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は内外面にヨコナデが施される。色調は明黄褐色を呈するが、外面の一部には煤が付着し黒褐色を呈する。復元口径16.8cmを測る。18は複合口縁部の稜は横方向に向かって引き出され、口縁は外反気味に立ち上がり、端部は細くなりながら丸くおさめる。調整は内外面にヨコナデが施される。法量は復元口径15.7cmを測り、色調は橙色を呈する。19は複合口縁部は斜め上方に向かってほぼ真っ直ぐに立ち上がり、端部は薄く引き出される。調整は内外面がヨコナデで、内面頸部以下はヘラケズリが施される。法量は復元口径19.1cmを測り、色調は橙色を呈する。20はやや長めの口縁が斜め上方に向かって真っ直ぐに立ち上がり、端部が外側へ軽く曲がる。調整は風化が著しく不明である。法量は復元口径21.2cmを測り、色調は橙色を呈する。21はゆるくカーブして開く複合口縁部の先端を薄く引き出している。調整は風化が著しく不明である。法量は復元口径15.4cmを測り、色調は明黄褐色を呈する。

第24図22～25はSI-01北側斜面より出土したものである。22は複合口縁部の稜は横方向に突出し、厚手の口縁が均等な厚さをもち斜め上方に向かって真っ直ぐに立ち上がり、その端部を丸くおさめる。調整は外面にヨコナデが施されるが、内面は風化のため不明である。口径は小片のため復元することはできなかった。色調は明黄褐色を呈し、外面の一部は煤が付着し黒褐色を呈する。23はやや厚めの口縁がゆるく開き気味に立ち上がり、端部付近でさらに外方に開く。調整は風化が著しく不明である。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。色調は明黄褐色を呈する。24は複合口縁部の稜は横方向に突出し、口縁はほぼ真っ直ぐに伸びて端部を丸くおさめる。調整は口縁部外面にヨコナデが施される。法量は復元口径20.4cmを測り、色調は橙色を呈する。25は複合口縁部の稜はやや斜め下方に引き出され、口縁はゆるく外反して立ち上がる。調整は内外面にヨコナデが施される。口径は小片のため復元することはできなかった。色調は明黄褐色を呈する。

第24図26はSI-01南西側の丘陵頂部より出土したものであり、色調は橙色を呈する。複合口縁部の稜は横方向に突出し、口縁は外反気味に立ち上がり中途で外方に折れ曲がる。調整は内外面ともヨコナデが施される。法量は小片のため口径を復元することはできなかった。



第24図 遺構外出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

第25図27～29はしっかりした平底を有する壺壺類底部の破片であり、いずれもSI-01南東側の急斜面より出土した。27は復元底径12.2cmを測るものであり、調整は外間にハケメが施されている。28は復元底径5.9cmを測るものである。調整は風化が著しく不明である。29は復元底径9.6cmを測るものであり、若干上げ底気味になっている。調整は風化のため不明である。

第26図30・31はSI-01南東側の急斜面より出土した壺壺類肩部の破片である。30は平行沈線に挟まれるように波状文が巡り、胴部には斜め方向のハケメが施されている。内面にはヘラケズリと考えられる砂粒の移動が認められる。色調は橙色を呈するが、外面の一部には煤が付着し黒褐色を呈する。31も平行沈線に挟まれるように波状文が巡り、内面の頸部以下にはヘラケズリが施されている。色調はにぶい黄褐色を呈する。

第26図32・33はSI-01南東側の急斜面より出土したコシキ形土器の破片であり、胎土、焼成、色調などから同一個体と考えられる。32は横方向に取り付けられた把手のやや上にアクセントをつけ、僅かに内湾気味にすぼまる口縁をもつ。調整は外面に継方向のハケメが認められ、内面の口縁部付近には指頭圧痕が残り、これより下にはヘラケズリが施されている。法量は復元口径12.4cmを測る。33は緩やかに開く底部の破片であり、復元底径40.3cmを測る。調整は端部内外面がヨコナデで、内面には継方向のヘラケズリが施されている。いずれも色調はにぶい黄橙色を呈する。

第27図34～36は器台と考えられる。34・35は口縁或いは裾端部の破片であり、先端部は肥厚され、緩やかに外側につまみ出されている。34は加工段北側の急斜面より出土したものであり、復元口径17.3cmを測る。色調は橙色を呈する。35はSI-01南東側の急斜面より出土したものであり、復元口径19.0cmを測る。色調は暗褐色を呈する。36は器台筒部から受部にかけての破片と考えられる。筒部が縮約するタイプのものであり、色調は橙色を呈する。風化のため調整は判然としないが、内面にはケズリによる砂粒の動きは観察できなかった。加工段北側の急斜面より出土した。

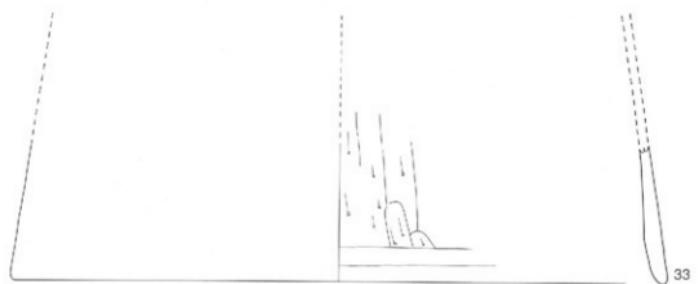
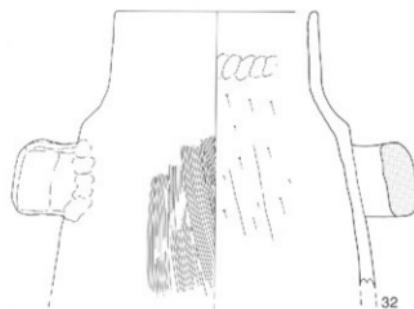
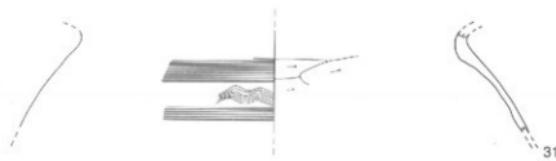
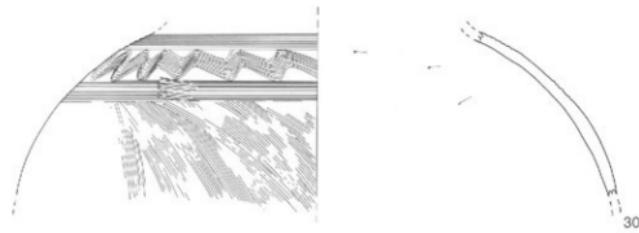
第27図37はSI-01の南東側斜面より出土した鉢形土器の破片で、色調は暗灰黄色を呈する。底部から斜め外方へ向かって立ち上がり、胴部付近で屈曲し内湾しながら口縁部に至る。口縁部は肥厚して丸くおさめる。調整は内外面にヘラミガキが施される。法量は復元口径9.0cmを測る。

第27図38は須恵器坏身である。SI-01南側の丘陵半坦面から出土したものであり、腐葉土層中より採取された。平坦な底部より体部は外傾して伸び、口縁は若干先細りとなっている。底部の切り離しは回転糸切りであり、その他については回転ナデが施されている。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。法量は口径12.5cm、底径7.8cm、器高3.5cmを測る。

第27図39はSI-01南東側の急斜面から出土した鉄片である。刃部のような特徴的な箇所はなく、性格は不明と言わざるを得ない。長さ4.5cm、幅2.7cm、厚さ0.8cm、重量9.4gを測る。

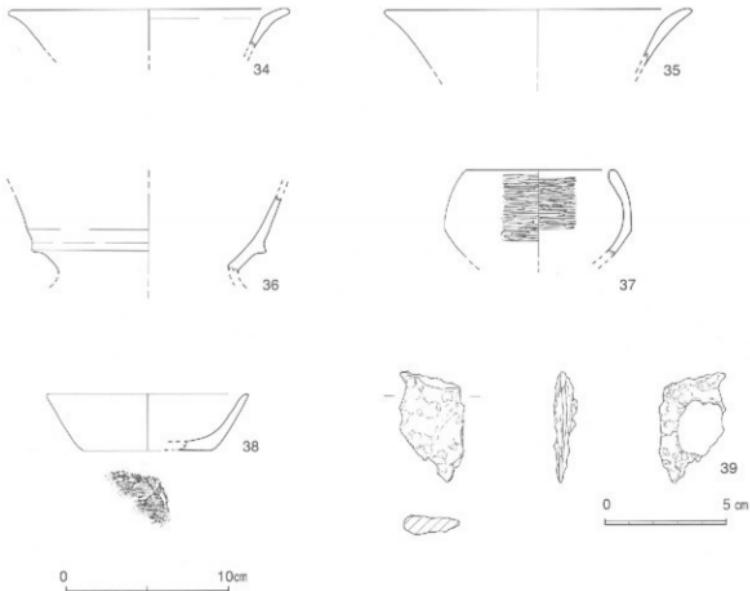


第25図 遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)



0 10cm

第26図 遺構外出土遺物実測図 ($S = 1/3$)



第27図 遺構外出土遺物実測図 (土器S=1/3・鉄器S=1/2)



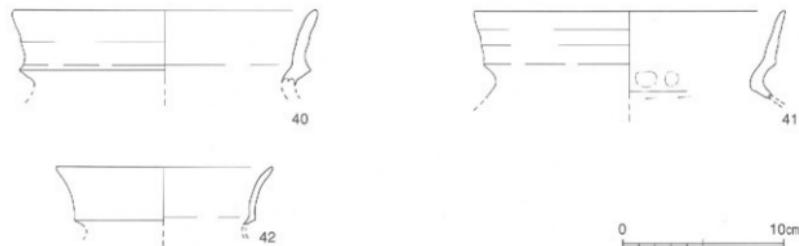
SI-01南東側の急斜面土器漏り遺物出土状況 (第26図32)

5.T-2トレンチ

T-2は北へ向かって突き出した尾根の北東向き緩斜面に設定した $2 \times 5\text{m}$ を測るトレンチであり、設定面での標高は47.00~50.00mを測る。ここからは堅穴住居跡の壁面の一部と床面を検出した。床面からは壁体溝1本、柱穴1個、炉1個がみつかり、壁の立ち上がりは最大で20cmを測るが、周囲を緑地帯として現状保存していただくこととなつたため、柱穴、壁体溝の掘削は行わず、そのままの状態で埋め戻しを行い調査を終了した。このため住居跡の平面形、規模等はわからない。

遺物としては、試掘調査時に堅穴住居跡の埋土から複合口縁をもつ壺口縁部の破片3点(第28図40~42)が出土している。

T-2トレンチ出土遺物(第28図40~42) 第28図40~42は複合口縁をもつ壺口縁部の破片である。40は複合口縁部の稜が横方向に強く突出し、やや厚めの口縁がほぼ真っ直ぐに伸びているもので、端部は丸くおさめる。調整は外外面ともヨコナデが施されている。法量は復元口径18.9cmを測り、色調はにぶい褐色を呈する。41は複合口縁が斜め上方に向かって真っ直ぐに開き、その厚みは端部に行くに従い徐々に薄くなり、先端はシャープにおさめる。調整は口縁部内外面ともヨコナデで、頸部内面以下にヘラケズリが施され、頸部内面の一部には指頭圧痕が観察できる。法量は復元口径19.4cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。42は良く外反する複合口縁をもつものである。外外面とも風化が著しく器壁が非常に薄くなつておらず、調整も不明である。色調はにぶい黄橙色を呈する。法量は復元口径13.5cmを測る。



第28図 T-2トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

T-2トレンチ遺構検出状況



第4節 まとめ

今回の折原中堤遺跡の調査では、尾根の頂上部とその周辺から竪穴住居跡1棟(SI-01)、加工段1段、焼土坑2個を検出した。ここでは遺構の時期について若干触れ、まとめとしたい。

SI-01は調査区のはば中央、北に向かって伸びる尾根の頂部で検出された隅丸方形を呈する竪穴住居跡であり、検出面での標高は67.25~67.75mを測る。床面及びピット内から出土した遺物は草田4期^{註2}でも草田7期でもなく、弥生時代後期後半の草田5期~草田6期に含まれるものである。埋土から出土した遺物も概ね同時期と考えられるものであり、遺構の廃棄時期は草田5~6期と考えられる。また、SI-01の北東、標高47.00~50.00mの辺りに設定したT-2トレンチからも竪穴住居跡を確認しており、ここからは草田5期に含まれる甕が出土している。

次に第1加工段は調査区の南西、尾根上の平坦面からやや下に降りた位置にあり、標高66.00~66.75mを測る場所で検出された。遺物には加工段平坦部から10cmほど浮いた位置より古墳時代前期に比定されている布留系の甕が出土している。

最後に焼土坑SK-01・02である。土坑周囲には赤褐色の焼土が残り、埋土の底部からは炭化物を多く含んだ層が検出された。遺物が出土していないことから時期は不明と言わざるを得ない。埋土は非常に軟弱なものであり、恐らく小炭焼きに関連した土坑と思われる。

集落跡として折原中堤遺跡を考える上で、谷(現在は堤)を挟んだ東側に位置する折原上堤東遺跡とは不可分の関係にあったと思われる。折原上堤東遺跡では、弥生時代後期後半と、古墳時代中期を中心として住居が造られている。特に、今回検出された竪穴住居跡と折原上堤東遺跡第II調査区から検出されたSI-08とは同様のピットの配置をもつものであり、時期も近い。一つの集落としてとらえるべきかもしれない。

[註]

註1 『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1994年3月 (P-26)

註2 『宮谷遺跡発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 2000年3月 (P-30)

註3 赤沢秀則「1. 出土遺物・時期」「南譜武草田遺跡 譜武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5」

鹿島町教育委員会 1992年3月 (P-38)

[参考文献]

・一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IX

『塩津丘陵遺跡群』(塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附 龟ノ尾古墳) 島根県教育委員会 1998年3月

古 城 遺 跡

第4章 古城遺跡

第1節 調査に至る経緯

八雲村大字西岩坂に所在する元田地区は、低丘陵と意宇川に挟まれた低地に位置する。北の丘陵に沿って土水路があるものの、水路幅は非常に狭く水捌けも悪い。このため降雨時には冠水をきたし、耕作に支障が出ている状況にある。これに対処するために八雲村では元田地区から下流の青木地区に至る870m区間の土水路に排水溝(大型フリューム及びボックスカルバート)を敷設することにより降雨時の冠水を防止し、農業経営の安定を図ることとした。

この事業に先立ち、平成5年10月20日、八雲村産業課から八雲村教育委員会あてに農業用川排水路整備工事予定地内における埋蔵文化財有無についての照会がなされた。工事は基本的には現在利用されている土水路を拡幅し、排水溝を敷設するものであったが、古城遺跡の存在する低丘陵を横断させ、現在迂回して流れている土水路を真っ直ぐに改修する計画も含まれていた。このため、この部分について計画変更が可能かどうかの協議を行ったが、水量等の関係もあり水路を迂回させた状態のままでは計画自体が成り立たなくなるとの結論に達し、八雲村教育委員会が主体となり調査を行うこととなった。

第2節 調査の経過

調査はまず、遺跡の範囲と性格を把握するための試掘調査を行うこととした。試掘トレンチは水路が丘陵斜面を横断する場所に1.5×3mトレンチを2個(T-1・2)と丘陵先端の法面となる場所に1.5×6mトレンチ1個(T-3)を設定した。開発予定地内に廃棄土捨て場が無く、隣接する水田及び畠地を無償で借り受けて廃棄土の仮置き場とした。平成7年1月26日より調査を開始したが、地山までが予想以上に深く、廃棄土置き場を拡張することとなった。また、湧水も著しく水中ポンプを作動させながらの作業であった。それでも何とか予定していた1月27日に遺構の精査、写真撮影、実測図の作成を行うことができた。

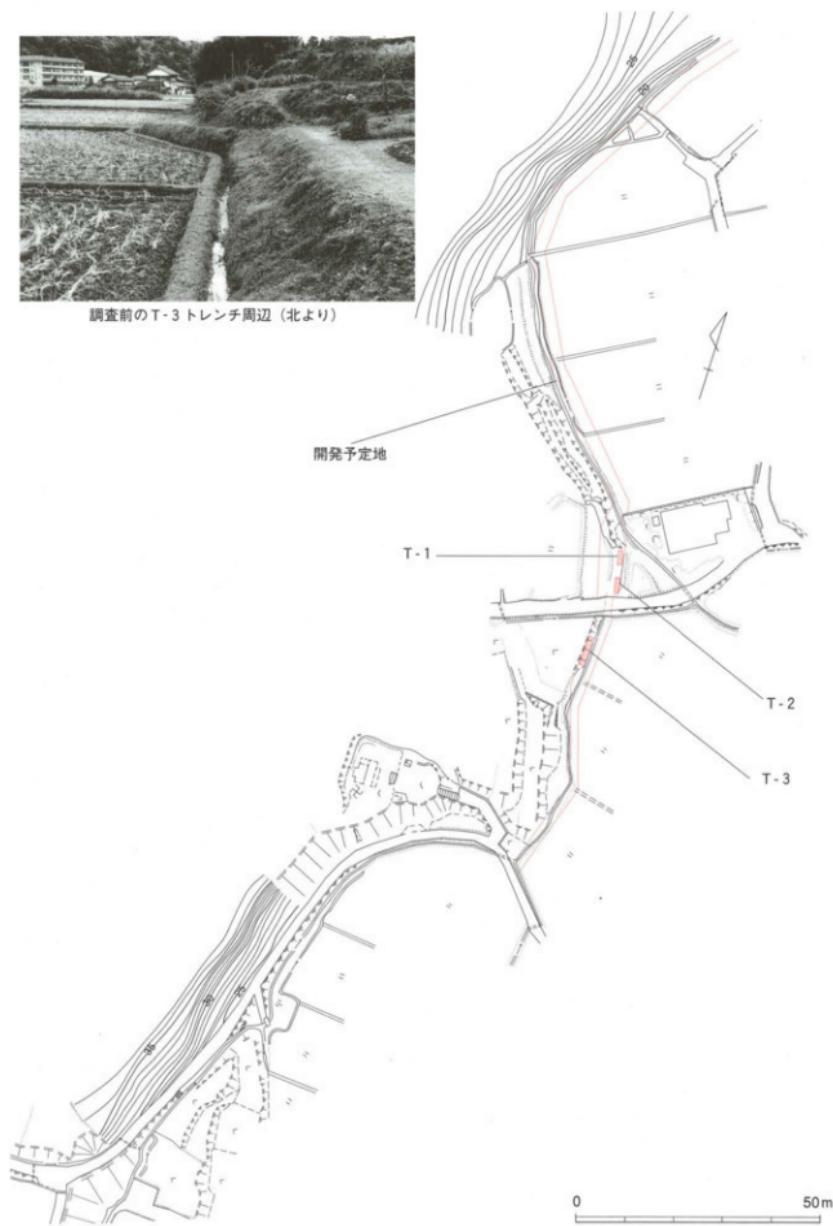
試掘調査により丘陵先端の崖面に設定したT-3トレンチより遺構を検出し、この調査結果をふまえて遺跡保護の協議が行われた。協議の結果、丘陵先端の崖面は工事計画から外していただくことになり、試掘調査をもち現地での調査を終了することとなった。この後、2月7日・8日にトレンチの埋め戻し作業を行っている。

第2表 平成6年度調査工程表

名 称	調査内容	事 業 者	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
山羌メモリアルパーク	試掘調査	創価学会			4/4～5/20									
折原跡遺跡	試掘調査	八雲村役場環境課			5/23～5/24									
安田古墳群1号墳	本 淹 取						7/15～8/5							
外輪谷横穴墓群12号穴	試掘調査	松江土木建築事務所						8/8～8/26						
折原中從遺跡	試掘調査	八雲村役場産業課							8/29～9/21					
本 淹 取										10/19～11/16				
古城遺跡	試掘調査	八雲村役場産業課							9/22～10/12				12/1～1/18	
前出遺跡	試掘調査	八雲村役場産業課										1/26～1/27		
	試掘調査	松江土木建築事務所								2/10～3/7				



調査前のT-3 トレンチ周辺（北より）



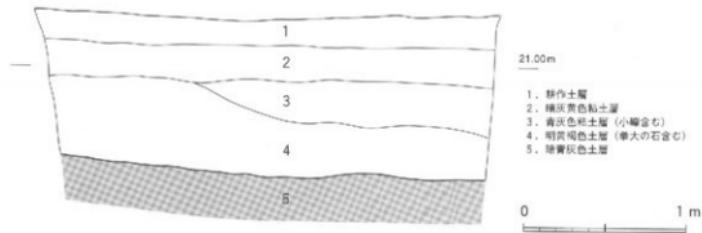
第29図 調査区配置図 ($S = 1 : 1,000$)

第3節 遺跡の概要

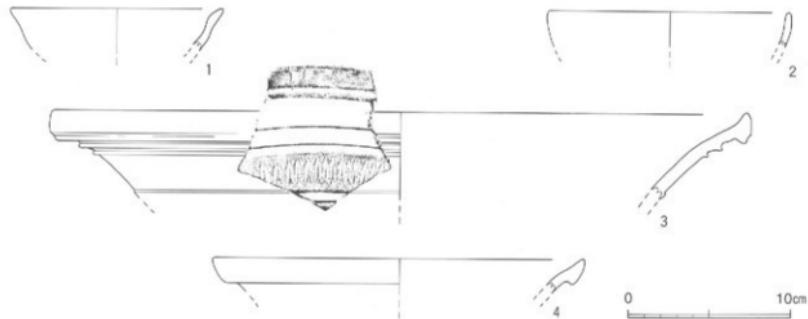
1.T-1トレンチ(第30図)

排水溝が低丘陵を横断する場所に設定した $1.5 \times 3\text{ m}$ のトレンチであり、設置した畑地での標高は21.25~21.50mを測る。第3~4層は砾が多く含んでおり、土石流状を呈する。一見すると低丘陵を削って作られた畑地のようであるが、調査により本来は谷間であったことが判明した。遺物としては1・2・4層より須恵器、土師器の破片が出土した。但し、この層からは近代の瓦、陶磁器の破片も出土しており、近代の層と推定される。遺構は検出されなかった。

T-1トレンチ出土遺物(第31図1~4) ここでは実測可能な須恵器4点を掲載した。1・2は壺口縁部の破片である。1は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で外方に折り曲げられている。調整は内外面ともに回転ナデが施されている。法量は口径13.2cmを測る。第1層耕作土層より出土した。2は口縁部が内湾気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。調整は内外面ともに回転ナデが施されている。法量は口径15.0cmを測る。第2層暗灰黄色粘土層より出土した。3は壺口縁部の破片であり、口径43.0cmを測る大型のものである。口縁部は大きく開き、端部で上下に引き出された形状をなしている。調整は外面の突帯と突帯に挟まれた場所に比較的幅があり、ピッチの狭い波状紋が施されている。第2層暗灰黄色粘土層より出土した。4は壺口縁部の破片である。口縁端部は肥厚され、断面三角形を呈する。調整は内外面ともに回転ナデが施され、法量は口径22.8cmを測る。第2層暗灰黄色粘土層より出土した。



第30図 T-1トレンチ土層断面実測図 ($S = 1/30$)

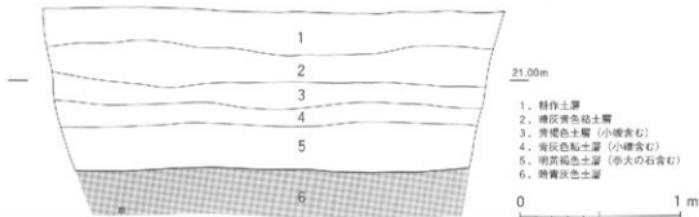


第31図 T-1トレンチ出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

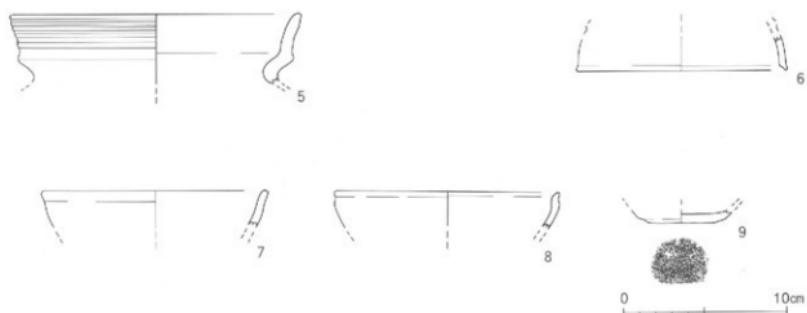
2.T-2トレンチ(第32図)

T-1トレンチの南東側に設定した1.5×3mのトレンチであり、設置した畠地での標高は21.25～21.50mを測る。第3～5層は疊を多く含んでおり、土石流状を呈する。一見すると低丘陵を削って作られた畠地のようであるが、調査により本来は谷間であったことが判明した。遺物としては1・2・4層より弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器の破片が出土した。但し、この層からは近代の瓦や陶磁器の破片も出土しており、擾乱を受けていた。遺構は検出されなかった。

T-2トレンチ出土遺物(第33図5～9) 5は弥生土器壺口縁部の破片である。複合口縁部の稜は横方向に突出し、外反して立ち上がる口縁をもつ。調整は口縁部内面がヨコナデ、外面には擬凹線が施されている。法量は口径18.0cmを測る。第4層青灰色粘土層より出土した。6は須恵器壺蓋の破片である。口縁端部内面に段をもつものであり、内外面に回転ナデが施されている。法量は口径12.8cmを測る。第2層暗灰黄色粘土層より出土した。7・8は須恵器壺口縁部の破片である。7は斜上方に開く口縁の外面に綴いアクセントをもつものであり、調整は内外面ともに回転ナデが施されている。法量は口径14.1cmを測る。第1層耕作土層より出土した。8は斜上方に立ち上がる体部をもち、口縁部は括れる。調整は内外面ともに回転ナデが施されている。法量は口径13.9cmを測る。第2層暗灰黄色粘土層より出土した。9は土師質土器底部の破片である。底部との切り離しは回転糸切りであり、内面には回転ナデが施されている。法量は底径4.2cmを測る。第2層暗灰黄色粘土層より出土した。



第32図 T-2トレンチ土層断面実測図 (S=1/30)



第33図 T-2トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

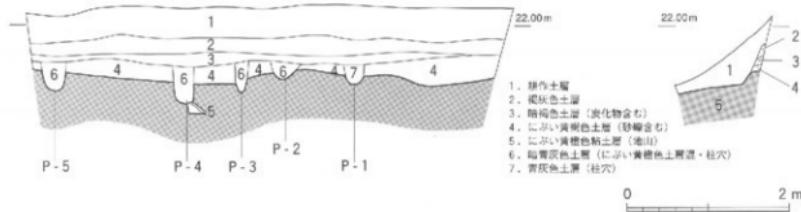
3.T-3トレンチ(第34図)

丘陵尖端の急斜面に設定した $1.5 \times 6\text{ m}$ トレンチである。この急斜面は、本来意宇川に向かって伸びていた丘陵緩斜面がカットされてできたものである。遺構を検出したものの、既に掘削を受けており断面でしか捉えることができなかった。

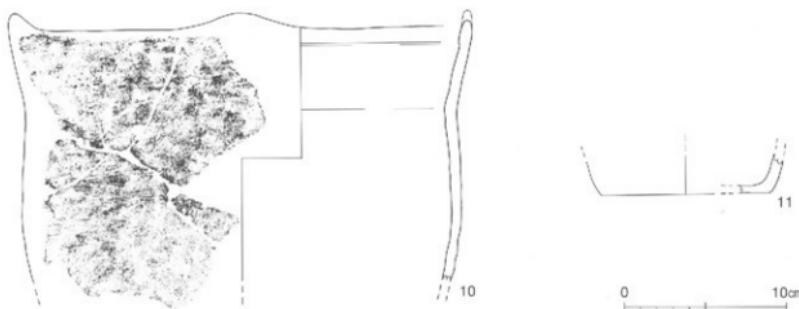
検出された遺構にはピット5個(P-1～5)がある。標高21.48～21.56mを測る位置から掘り込まれており、検出面での規模はP-1が上縁径24cm・深さ最大24cm、P-2が上縁径38cm・深さ最大22cm、P-3が上縁径17cm・深さ最大40cm、P-4が上縁径23cm・深さ最大45cm、P-5が上縁径31cm・深さ最大35cmを測る。P-4の底部からは根石が検出された。

遺物としては、ピット検出面直上に堆積した第3層の暗褐色土層より須恵器、土師器の破片が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。また、ピットが掘り込まれている第4層のにびい黄褐色土層からは縄文土器の深鉢が出土した。

T-3トレンチ出土遺物(第35図10・11) 10は第4層のにびい黄褐色土層より出土した縄文土器深鉢口縁部の破片である。体部は内湾して立ち上がり、頸部で括れ、口縁部に向かっては開き気味に立ち上がる。口縁部は緩やかな波状口縁となっており、内面には段をもつ。調整は体部外面がナデ後巻貝条痕が施され、内面は風化が著しいが、一部に巻貝条痕を観察することができる。また、口縁部外面から体部外面にかけて炭化物が付着している。法量は口径28.2cmを測る。時期は縄文時代晚期前半のものと考えられる。11は第4層のにびい黄褐色土層より出土した縄文土器深鉢底部の破片である。平底の底部であり、底径は10.4cmを測る。10の口縁部と折り重なるように出土しており、胎土・色調などからも同一個体と考えられる。



第34図 T-3トレンチ土層断面実測図 ($S = 1/60$)



第35図 T-3トレンチ出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

第4節 まとめ

今回の古城遺跡の調査では、丘陵突端の急斜面に設定したT-3トレンチからピット5個(P-1～5)を検出した。ここでは各トレンチから出土した遺物について若干触れ、まとめとしたい。

T-1・2トレンチは標高21.25～21.50mを測る低丘陵に設定したものである。堆積した土砂は拳大の石を多く含み、長い年月を経て堆積したものではなく、一気に埋まった様相を呈する。この層からは弥生土器・上師器・須恵器・土師質土器に混じり、近代の瓦や陶磁器の破片も出土している。本来は谷であった部分を埋め立て、谷水田として利用していたものと考えられる。

T-3トレンチからはピット5個が検出されている。ピット検出面直上に堆積した第3層からは須恵器、土師器、土師質土器が出土しているが、細片のため細かい時期は判らない。また、ピットが掘り込まれていた第4層からは縄文時代晚期前半の深鉢1個体分がつぶれた状態で出土しており、付近にこの時期の住居跡が存在する可能性がある。斜面上方にあたるトレンチ西側には緩斜面が広がり、広い範囲で黒曜石・須恵器・土師器の細片を探取することができる。今回は試掘調査にとどまったが、付近に縄文時代から奈良時代にかけての集落跡が存在するものと思われる。

[註]

註1 柳浦俊一氏のご教示による。(P-45)

図 版



遺跡周辺空中写真（平成 3 年撮影）

図版2 (折原峠遺跡)



発掘調査前の折原峠遺跡（南西より）



発掘調査後の折原峠遺跡（北東より）

図版3 (折原峠遺跡)



現在の折原峠遺跡周辺(南西より)



SK-01 全景(西より)

図版4 (折原峠遺跡)



SK-02 全景 (南東より)



第1・第2加工段全景 (南より)

図版5 (折原峠遺跡)



第2加工段床面遺物出土状況（第10図5）



発掘作業風景（北より）

図版6 (折原峠遺跡)



SK-01 出土遺物



10-5

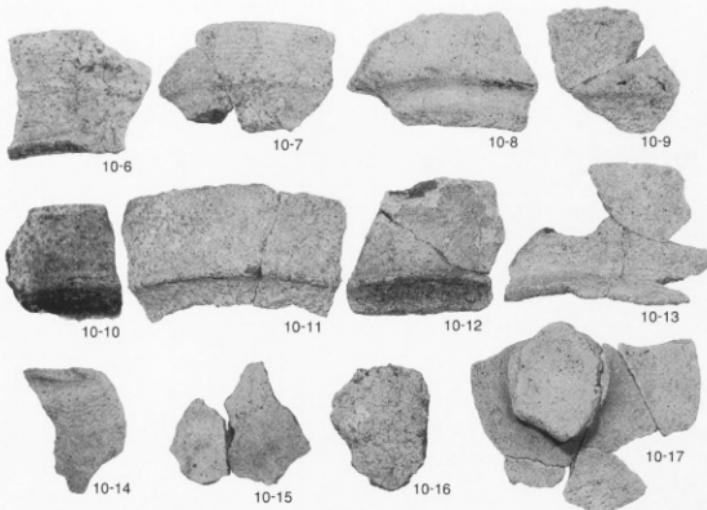
第2 加工段床面出土遺物



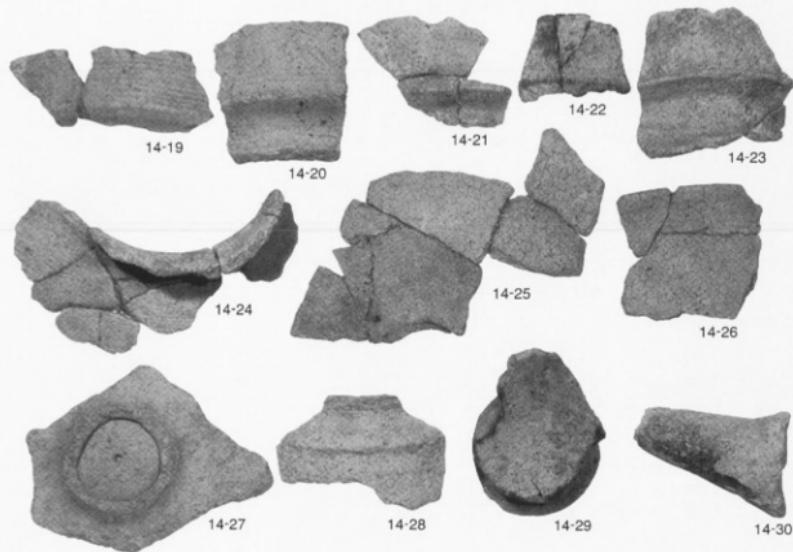
12-18

SD-01 出土遺物

図版7 (折原峠遺跡)



第2加工段埋土出土遺物



遺構外出土遺物

図版8 (折原中堤遺跡)



発掘調査前の折原中堤遺跡（北北東より）

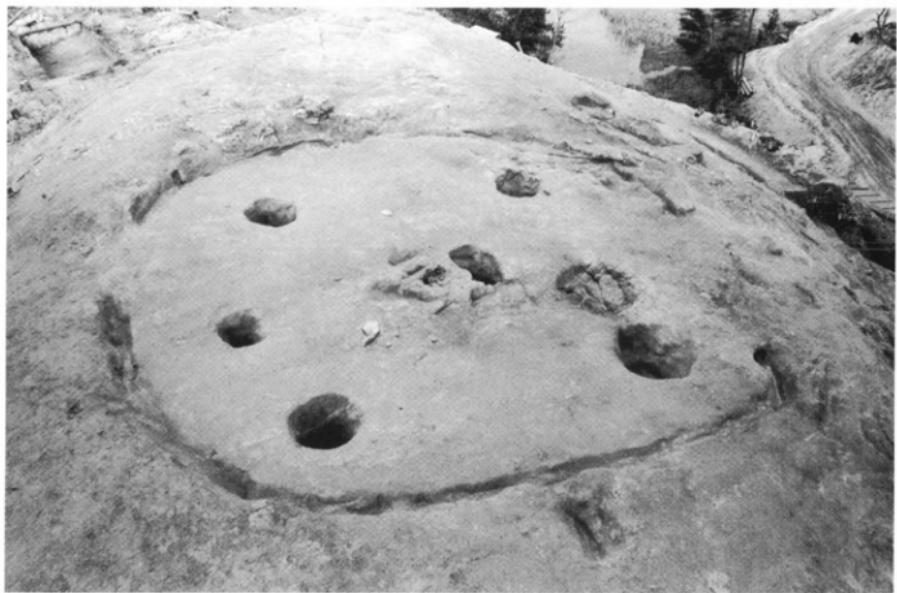


発掘調査後の折原中堤遺跡（南南西より）

図版9 (折原中堤遺跡)



現在の折原中堤遺跡（南東より）



SI-01 全景（南南西より）

図版10 (折原中堤遺跡)



SI-01・P1 遺物出土状況 (第18図1)



第1加工段全景 (西より)

図版11 (折原中堤遺跡)

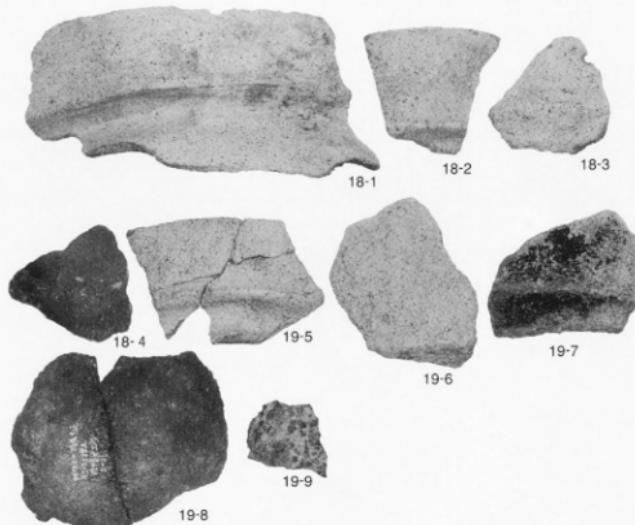


SK-01 全景（南より）

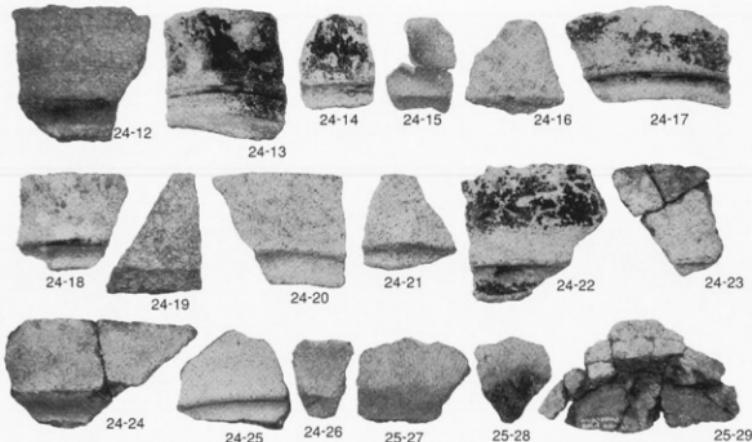


発掘作業風景（南より）

図版12 (折原中堤遺跡)

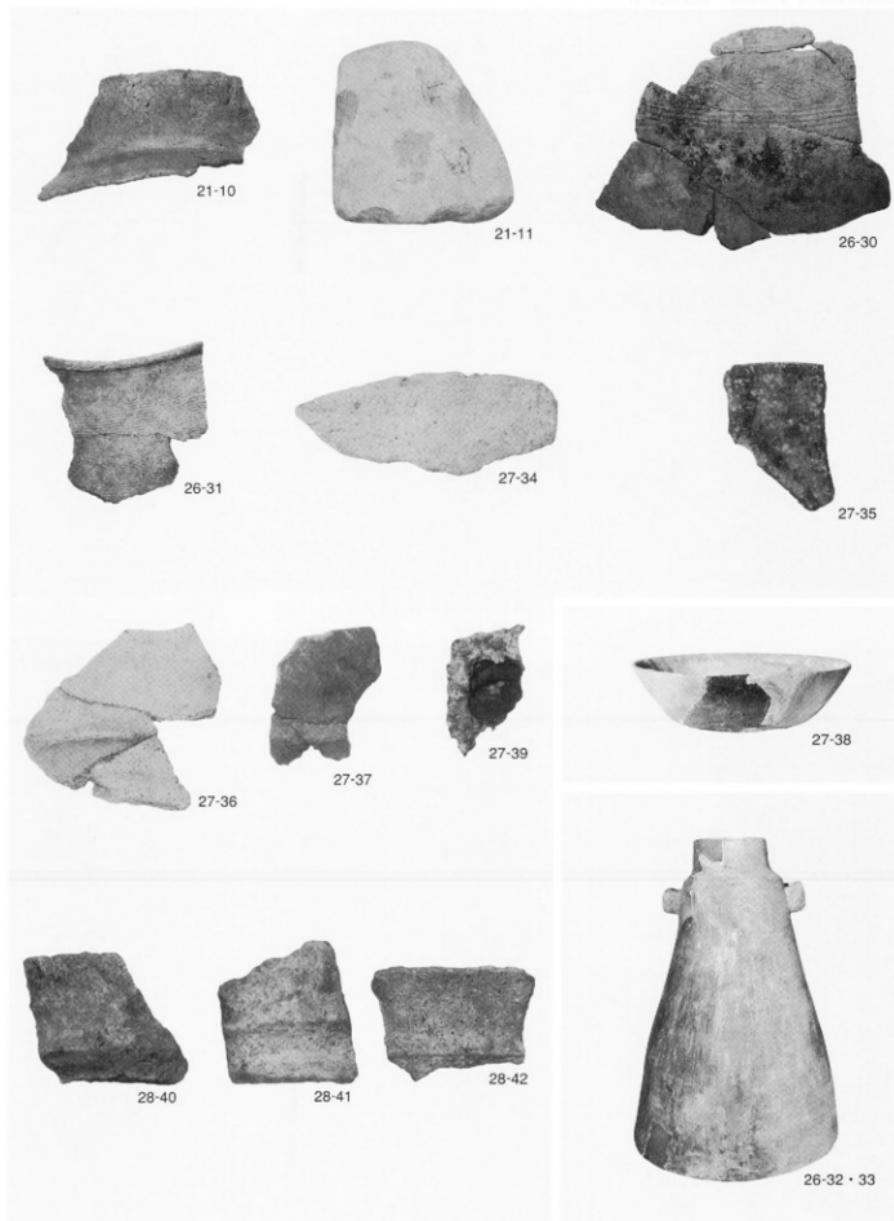


SI-01 出土遺物



遺構外出土遺物

図版13 (折原中堤遺跡)



第1加工段・造構外・T-2トレンチ出土遺物

図版14 (古城遺跡)



発掘調査前の古城遺跡（東より）



現在の試掘調査区周辺（北西より）

図版15 (古城遺跡)



T-1 トレンチ全景 (西より)



T-2 トレンチ全景 (南より)

図版16 (古城遺跡)



T-3 トレンチ全景（北東より）

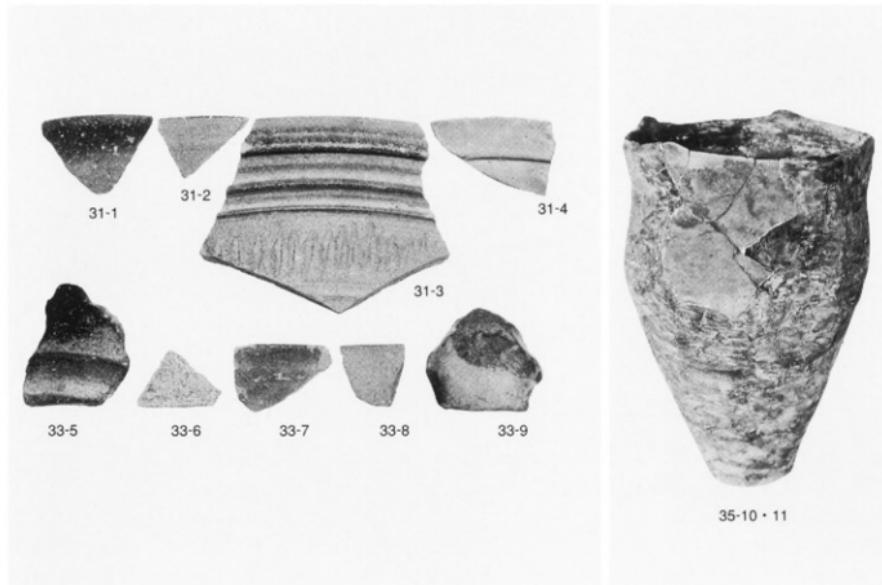


T-3 トレンチ遺物出土状況（第35図10・11）

図版17 (古城遺跡)



発掘作業風景（北より）



古城遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おりはらとうげいせき・おりはらなかづみいせき・こじょういせき						
書名	折原峠遺跡・折原中堤遺跡・古城遺跡						
副書名	八雲村文化財調査報告						
卷次	22						
編集者名	川上 昭一						
編集機関	八雲村教育委員会						
所在地	〒690-2103 島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地 TEL(0852)54-2478						
発行年月日	平成15(2003)年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
折原峠遺跡	島根県 八束郡 八雲村 大字東岩坂	32305 F101	35度24分3秒	133度6分2秒 133度5分2秒	1994.7/15 1994.8/5	102	折原配水池 築造工事
折原中堤遺跡	島根県 八束郡 八雲村 大字東岩坂	32305 F100	35度24分6秒	133度5分52秒 1995.1/18	1994.12/1 1995.1/18	473	八雲村中央 公園整備工事
古城遺跡	島根県 八束郡 八雲村 大字西岩坂	32305 F51	35度24分21秒	133度5分13秒 1995.1/26 1995.1/27	1995.1/26 1995.1/27	18	農業用用排水路整備工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
折原峠遺跡	集落跡	弥生時代	落とし穴・ 加工段	弥生土器	村内初となる弥生時代後期中葉の遺構。		
折原中堤遺跡	集落跡	弥生時代 後期後半	竪穴住居跡・ 加工段・ 焼土坑	弥生土器・ 土師器・鉄器	尾根頂部より竪穴住居跡を検出。見晴らしが良く、折原中堤遺跡・折原峠遺跡・折原下堤遺跡等を眼下に置く。		
古城遺跡	集落跡	縄文時代、 古墳時代	ピット	縄文土器・ 須恵器	試掘調査時に丘陵緩斜面よりピット5個を検出。工事の計画変更により現状保存となる。		

折原峠遺跡
折原中堤遺跡
古城遺跡

平成15(2003)年3月

発行 八雲村教育委員会
島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地
印刷 株式会社 島根県農協印刷
島根県松江市浜乃木二丁目10番52号